



靖國神社みたままつり

7月13日から16日まで、恒例の靖國神社「みたままつり」が盛大に斎行された。参詣者は延べ33万余名に及び、今や、都心で催される新暦の一大盆祭

りとして定着しているが、これは「我が国古来の習俗」でもあるのである。7月13日、この日は新暦のお盆の入りである。迎え火といって、盂蘭盆の行事の一つとして、昔は7月13日の夜先祖の精霊を迎えるために、家の門前

で麻幹おがら(麻の皮を剥ぎ取った茎)を焚いたものである。いつの頃からか麻幹おがらの日は夕刻、提灯を持って先祖のお墓に詣り、提灯で足元を照らしながら先祖の霊を家まで導いて行く迎え火の行

報 特 攻
 平成24年8月

第92号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-1-1靖國神社遊就館内・地階

電話 03 (5213) 4594
FAX 03 (5213) 4596

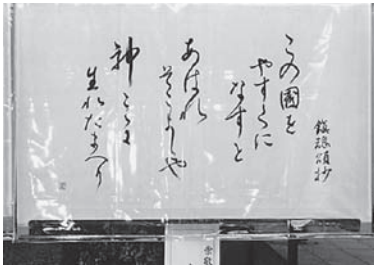
http://www.tokkotai.or.jp
振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能
発行人 羽淵徹也
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

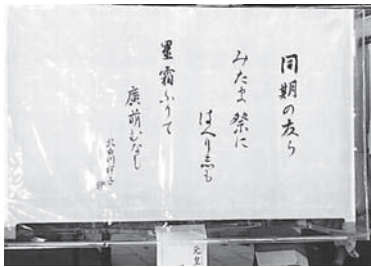
靖國神社みたままつり	1
暑中お見舞い	3
殉國沖繩學徒顯彰六拾七年祭	6
平成24年度豫科練雄飛会戦没者慰霊祭	9
護國神社の花吹雪	10
追悼 菅原道熙顧問	11
田中賢一著・私家版詩歌集	11

目次

『草莽の声(二)』より	13
平成24年戦艦「大和」を旗艦とする艦隊戦没者「徳之島慰霊祭」に参列して	14
天号航空作戦計画・天号作戦の発動	15
沖繩航空作戦における陸海航空部隊の投入並びに損失機数表等	16
第36回都市特別攻撃隊戦没者慰霊祭に参列して	18
第53回出水市特攻碑慰霊祭に参列して	20
京都霊山護國神社に「あ、特攻」勇士之像建立	21
国民の皇室観	22
平成24年度知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列して	23
第45回豫科練戦没者慰霊祭に参列して	24
義烈空挺隊出撃67周年慰霊祭	25
『観音湯』の思い出	26
世田谷の学童疎開と特攻隊	27
平成24年度義烈空挺隊慰霊祭に参列して	29
大東亜戦争に関する秘話「言い残しておきたいこと」	31
忘れ得ぬ人	31
回天特攻隊水隊 村上克巳少佐	40
『特攻隊に捧ぐ』の坂口安吾	43
「帰って来た蜩・慟哭の詩」	43
新刊図書紹介『蒼海に消ゆ』	46
或るアメリカ人二世の特攻	47
事務局からのお知らせ	47
事務局からの報告等	47



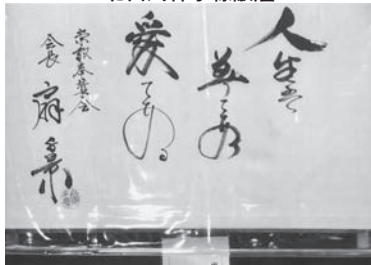
島津肇子様献燈



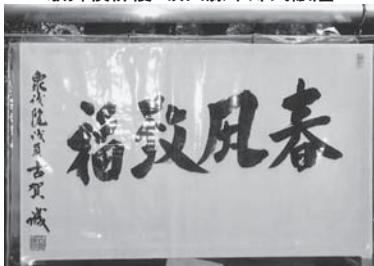
北白川祥子様献燈



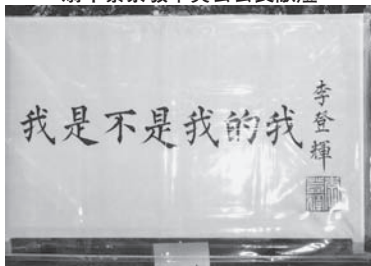
歌舞伎俳優 坂田藤十郎氏献燈



扇千景崇敬奉賛会会長献燈



古賀誠全日本遺族会会長献燈



李登輝元台湾總統献燈

○献燈(懸け雪洞)
 ・元皇族・皇太后女官長北白川祥子様
 同期の友ら みたま祭にはへりしも
 星霜ふりて 廣前むなし
 ・元皇族・崇敬者総代 島津 肇子様
 鎮魂頌より
 この國を やすくに なすと あはれ
 そこよしや 神ここに 生れたまへり

事が行われている。そして、先祖の霊を迎えた家族や集落の人々は、様々な祭り事を行って先祖の霊を慰め、家族の平穏と繁栄を祈り、やがてお盆の終わりの16日の夜は、再び送り火を焚いて精霊送りをするのである。
 13日は、靖國神社「みたまつり」の前夜祭の日である。例年のとおり、

暑い天気であった。
 大鳥居から第二鳥居前にある下乗札までの外苑参道両側には、沢山の屋台が連なり、焼き鳥、焼きそば、焼きとうもろこしなどの香ばしい匂いが漂っている。17時前後には、既に、学校や勤め帰りの若者達で賑わっていた。大村益次郎銅像の周りには、民謡や盆踊りの舞台が作られ、浴衣姿やはつぴ姿の人々も見受けられた。

社報「やすくに」第624号(平成19年7月1日)掲載の京都産業大学所功教授の論稿「みたま祭の来歴と意義」に詳しいが、この「みたま祭」の由来と意義に関して、次のような興味ある記述があるので、前回に引き続き再度紹介させていたたく。
 先ず、この「みたま祭」で慰霊されるのは、靖國神社の御祭神だけではなく、空襲等による一般戦没者も含まれるということである。

大太鼓の音を合図に、一斉に点灯された大小約3万個の懸け提灯や懸け雪洞が、境内や参道一面を明るく照らし出して「みたまつり」の前夜祭は始まった。昭和22年7月13日〜16日に、神社の正式行事として肅行されてから今年で満65年、66回目を迎えた。
 この「みたまつり」の由来や意義については、東京大学名誉教授小堀桂一郎博士著『靖國神社と日本人』(平成10年8月・PHP新書)や靖國神社

終戦直後の昭和20年9月、靖國神社を所管する陸軍省は「軍の解散前に、支那事変・大東亜戦争の為に死没した軍人・軍属等213万余柱の英霊」の「大合祀祭」実施を提唱する際、「敵の戦闘行動に因り死没したる者は、軍人・軍属に限定することなく全般的に合祀せらるゝ」ことを要望した。それに対して宮内省は、「柱数・氏名不明の一般戦死者」を本殿に合祀することは適当でないが、そのような人々の「慰霊祭を(別所)実施せらるゝ場合は、行幸(親拝)を御願ひする」ことも可能と回答している。その結果、昭和20年11月20日、昭和天皇の行幸・御親拝を仰いで臨時大招魂祭が肅行された、というところである。ところが、その後間もない12月15日に、占領軍総司令部は「国家神道、神社神道ニ対スル政府

暑中お見舞い
申し上げます

公益財団法人

特攻隊戦没者
慰霊顕彰会

理事長 杉山 蕃

専務理事 藤田 幸生

業務理事 衣笠 陽雄

事務局長 羽淵 徹也

公益財団法人 偕行社

理事長 志摩 篤

副理事長 塩田 章

副理事長 福田 一彌

副理事長 深山 明敏

専務理事 白石 一郎

事務局長 若木 利博

公益財団法人 水交會

会長 夏川 和也

理事長 藤田 幸生

副理事長 森本 茂夫

専務理事 齊藤 隆

事務局長 本多 宏隆

公益財団法人 海原會

理事長 藤野 雅之

顧問 前田 武

専務理事 羽田 俊一

航空自衛隊退職者団体
つばさ會

会長 竹河内 捷次

副会長 杉山 弘

副会長 山本 修三

副会長 小田 邦博

副会長 藤川 壽夫

専務理事 山本 隆之

副専務理事 小鹿 勝見

7月13日前夜祭の夕べ、能楽堂での「奉納歌謡ショー」で熱唱するベテラン歌手たち、約千名の聴衆を魅了した。



三浦光一 (85歳)
(異国の丘)



初代コロンビアローズ
(東京のバスガール)



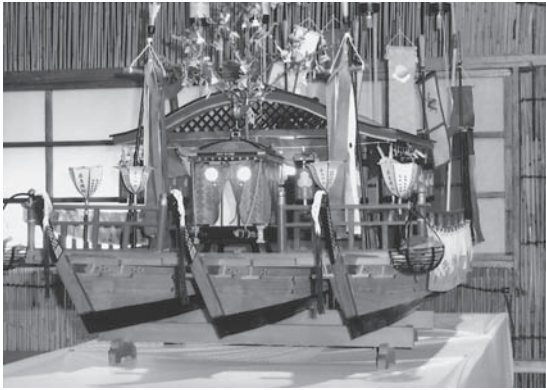
こまどり姉妹
(九段の母)



大津美子
(ここに幸あり)

ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ
廃止ニ関スル件」という、いわゆる「神
道指令」を通達し、政教分離の名の下
に、特に靖國神社を攻撃目標として、
精神面からこれをなきものにしようと
した。しかし、国民の間には祖国のた
めに生命を捧げた戦没者の慰霊・鎮魂
のことがまず第一に心にかかり、昭和
21年7月、長野県遺族会の有志80余名
が自発的に上京し、靖國神社境内の相
撲場で、民謡と盆踊りの奉納大会が賑
やかに催された。これに啓示されて、
翌22年7月からは、神社の正式行事と
して斎行されるようになった、このこ
とである。そして、その発案に関し、
民族学者の柳田國男翁(当時古稀)の
関与が挙げられている。

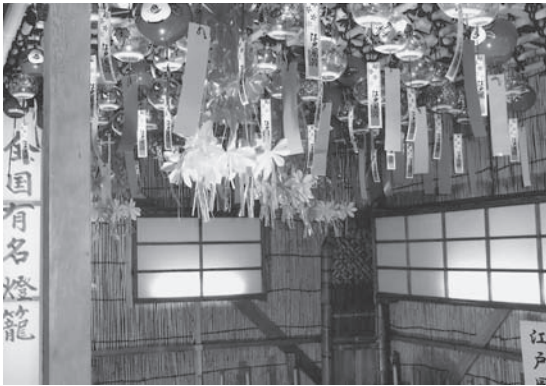
柳田翁は、東京大空襲の直後から、
日本の敗戦を見越して書き上げたとき
れるその著『先祖の話』の中で、日本
人の「生死を超越した殉国の至情に
は・・・これを年久しく培ひ育て、来
た社会性、わけても常民の常識と名づ
くべきものが、隠れて大きな働きをし
ている」と指摘し、「国の為に戦って
死んだ若人だけは、何としてもこれを
仏徒の謂ふ、無縁ほとけの列に疎外し
て置くわけには行くまいと思ふ・・・
喜んで(英霊を)守らうとする(国民
の)義務は、記念(憶)を永く保つこ



広島・宮島管絃船



左 弘前ねぶた燈籠・右 青森ねぶた燈籠



江戸風鈴



福岡・八女提灯

と、さうしてその志を継ぐこと、及び後々の祭を惹るにすること」だと提唱している。柳田翁は、兵庫県神崎の松岡家に生まれたが、長野県飯田の柳田家へ養子に入り、東京を中心に活躍していた。とりわけ長野の民族行事にも通曉し、民俗学を通じて県民に与えた影響力は強かったと思われる。翁が長野県遺族会の誰かに戦没者の慰霊のための盆踊りを靖國神社に奉納するように勧めたか、少なくとも相談を受けていた可能性がかなり高い、と所教授は指摘しておられる。「みたま祭」は、「我が国古来の習俗」でもあるのである。

更に靖國神社では、昭和24年7月の第3回「みたま祭」以来、7月13日夕刻、みたま祭前夜祭に先立ち、旧招魂斎庭において、大東亜戦争に際し「戦陣に死し戦域に殉じ非命に斃れた人々で、靖國神社に奉斎されざるみたまの慰霊祭」を「諸霊祭」と称して執り行うことが慣例となっていた。この「諸霊祭」では、復員局・厚生省から「祭神名票」が送られないため、神社に合祀されていない「軍人・軍属等」のほか、外地や内地で戦災等（空襲・原爆等）により死没した民間の人々もすべて一緒に慰霊することになった。

一方、政府主催の「全国戦没者追悼式」は、日本遺族会などの早くからの強い要望により、ようやく昭和38年5月の閣議決定を受けて、同年8月15日（停戦公表の日、月遅れの盆）に初めて実施されたが、これは前記靖國神社の「諸霊祭」を含めた「みたま祭」の延長戦上にあるものと言えよう。

右の閣議決定文には「今次の大戦における全戦没者（軍人・軍属及び準軍属のほか、外地において非命にたおれた者、内地における戦災死没者等をも含む）に対し、国をあげて追悼の誠を捧げる・・」とあり、しかも、「宗教的儀式を伴わない」と断りながらも、御臨席の天皇・皇后両陛下に合わせて「全国民が一斉に黙祷するよう勧奨」している。また、昭和39年の第2回追悼式は、靖國神社の境内で行われていた。更に、「終戦二十周年」の第3回追悼式からは、規模を拡げて国立の日本武道館で実施されることになったが、その際、正面中央の標柱に「全国戦没者之霊」と明記され、それへの拜礼・献花が今日まで続いている。神道の立場から見れば、この標柱は、全戦没者の神霊が宿る神籬ひもろぎの一種（榊や御柱みはしらの類）にほかならない、と所教授は指摘しておられる。更にまた、同教授は、ともあれ、7月の賑やかな「みたま祭」と8月の厳かな「全国戦没者追悼式」が、これからも共に永く続け



向かって左・鎮靈社

向かって右・元宮

られるよう念じてやまない、と述べておられる。全く同感である。このことは、靖國神社に寄せる日本人の誠の心の表れである。

○鎮靈社例祭（諸霊祭）

靖國神社の拝殿から本殿へ向かう左側の回廊の中程に出入り口の扉があった。その外側の旧招魂斎庭に二つの小社がある。向かって右の小社を「元宮」といい、左の小社は「鎮靈社」という。この二社とも大樹の下にひっそりと建っており、よく似た造りの小社であるが、「元宮」は瓦葺きで、「鎮靈社」は銅板葺きである。この旧招魂斎庭に入るには、通常、拝殿の左、回廊に連なる玉垣の奥の門からであるが、門扉が開けられているのは午前9時から午後4時までである。

「元宮」は文久2（1862）年、津和野藩士出身で、平田篤胤派の国学者として尊攘志士と共に王政復古に活躍した福羽美静（1831年〜1907年、維新後、藩主亀井茲監が神祇官副知事に就任すると、福羽も神祇関係の要職を歴任、1869年明治天皇の侍講となる）が中心となり、初めて徳川齊昭卿ら維新の志士46人の霊を慰めるため、京都の邸内に密かに祠堂を建てて祀った。奠都に伴い東京に

移されたが、招魂社の先駆けとも言うべき由緒ある祠堂で、昭和6年、福羽家より神社に奉納され、「元宮」と称して今日に至っているが、例祭日は4月1日である。

一方、左の小社「鎮靈社」は、「明治維新以来の戦争・事変に起因して死没し、靖國神社に合祀されぬ人々の霊を慰める為、昭和四十年七月に建立し萬邦諸国の戦没者も共に鎮齋」されており、例祭日は7月13日である。この「鎮靈社」は、靖國神社の第5代宮司を務められた（昭和21年1月から昭和53年3月死去までの32年間）筑藤藤磨氏が、前年の宗教者国際会議に出席し、ヨーロッパ諸国を訪問して帰国された後、各国とも先の大戦で、国際条約無視の無差別爆撃や人種迫害等により数百万にも上る非戦闘員の犠牲者の霊を弔う祭祀が行われている現状に鑑み、我が国でもそのような祭祀を行う必要性を痛感され、先の大戦での原爆や空襲による死没者を始め、前記のように明治維新以来の戦争・事変により死没し、靖國神社に合祀されない犠牲者、更には我が国民のみならず、万国の戦争犠牲者の霊を弔い、世界の平和を祈願するため、建立されたのが、この「鎮靈社」であり、靖國神社では「元宮」と共に毎日、神官による祭祀が行

われており、その例祭が、趣旨を同じくする「みたまつり」の前夜祭の後の宵祭りとして毎年7月13日の午後8時過ぎに行われている。

それより先、靖國神社では、昭和24年7月の第3回「みたまつり」以来、7月13日夕刻、みたまつり前夜祭に先立ち、旧招魂斎庭において、大東亜戦争に際し「戦陣に死し職域に殉じ非命に斃れた人々で、靖國神社に奉齋されざるみたまの慰霊祭」を「諸霊祭」と称して執り行うことが慣例となっていた。この「諸霊祭」では、復員局・厚生省から「祭神名票」が送られないため、神社に合祀されていない「軍人・軍属等」のほか、外地や内地で戦災等（空襲・原爆等）により死没した民間の人々もすべて一緒に慰霊することになった、とのことであり、「鎮靈社」建立以後は、前記のように同社例祭として齋行されている。

大樹の下、昼なお暗い霊域において、御社の二つの燈明が幽かに揺らぐのみの、暗闇に包まれ、静寂にして幽玄の氣に満ちた中での神儀で、筆策の音と共に、白装束の神官6名によって奉仕され、修祓、降神、献饌、祝詞奏上等が齋行される。参列者は、宮司以下遺族代表他十数名に過ぎない。

（飯田 正能記）

殉國沖繩學徒顯彰六拾七年祭

國沖繩學徒をお偲びする集



「祖国の防波堤となつた軍官民一体の沖繩防衛決戦があつたからこそ今の私共があり、御霊となつても祖国日本をお守り下さつてゐる殉國學徒の御霊に感謝の誠を捧げ、その気高き志を顕彰していく事こそ、沖繩の支配を目論む中国の脅威に毅然と立ち向かう精神の支柱になると存じます。……」

今年の「殉國沖繩學徒顯彰六拾七年祭」の案内文の冒頭に掲げられた学生実行委員会委員長上野竜太郎君（國學院大学四年生）の言葉である。

今年は、沖繩（琉球）本土復帰（昭和47年5月15日）から40周年、日中国交正常化宣言（昭和47年9月29日）から40年の節目の年である。しかし、尖閣諸島の領有権を始め、海洋進出・支配権拡大の野望を図る中国への対応、普天摩基地移設問題を始め日米安保新態勢の確立等、緊急に対応すべき難問が山積し、日本は外交・防衛態勢強化の正念場に立たされてゐる。

このような内外情勢多難の中の顯彰齋行であつたが、今年から第一部と第二部に分けて実施されることとなり、第一部は「殉國沖繩學徒をお偲びする集」として、靖國會館2階「偕行の間」で実施され、従前の祭典は第二部として、神社拜殿で齋行された。

第一部、第二部とも、昨年・一昨年の倍に近い約100名の参加者があつた。そして、その企画・運営もほとんど全部、若い学生諸君によつて実施されておゐり、大変頼もしく感じられた。

本顯彰祭は長年、元国士館大学教授金城和彦先生を代表とする「殉國沖繩學徒顯彰會」の主催によつて齋行されてきたが、その会務を取り仕切つて来

られた金城先生御夫妻が共に体調を崩され、事務を継続することができなくなつたため、その齋行が危ぶまれていたが、先生の御意志を受け継ぐ若い学生達の熱意と努力によつて、一昨年よりやく齋行に漕ぎ着けることができ、

昨年からはまた、全日本学生文化会議の支援を得て、学生実行委員会（委員長・國學院大学四年上野竜太郎君）が主催して齋行することとなつた。

6月23日は、沖繩「慰霊の日」である。沖繩戦最後の激戦地となつた糸満市摩文仁の丘の平和祈念公園内にある国立沖繩戦没者墓苑では、沖繩県の主

催による「沖繩全戦没者追悼式」が、野田佳彦首相、仲井真弘多知事他、衆参両院議長、遺族ら約5500人が参列して盛大に執り行われた。

仲井真知事は、平和宣言の中で「沖繩には、今なお広大な米軍基地が集中し、県民の負担は続いている」と述べ、相変わらず基地負担の軽減と普天間飛行場の県外移設などを強く求めたが、

祖国復帰、主権回復の意義などには一言も触れるどころか、尖閣諸島を始め、中国の飽く無き領海侵犯にさらされてゐる沖繩の現状、国防の緊要性に対する認識など、その欠けらぬものではないかと疑わざるを得ない発言を繰り返してゐた。

野田総理もまた、追悼式の挨拶の中で、「沖繩の米軍基地負担軽減について、具体的に目に見える形で進展させる」と述べたが、沖繩の占める国防上の重要性、日米安保深化の緊要性に関する説得力のある発言はなかつた。た

だ、これまでの総理の挨拶の中では言われたことのなかつた、沖繩戦の末期6月6日、海軍沖繩根拠地司令官大田實海軍少将が海軍次官宛に送信した訣

別電文の末尾に記された「沖繩県民斯ク戦ヘリ 県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」の文言を引用して、

沖繩戦での軍官民一致協力の敢闘に触

れたことは、これまで左翼活動家によつて歪曲された沖繩戦の史実、そして戦後沖繩県民の祖国復帰への活動の史実を些かなりとも明らかにしたとの思いがした。

沖繩慰霊の日に先立ち、去る5月12日には、沖繩県宜野湾市民会館において、民間主催の「沖繩県祖国復帰40周年記念大会」が、1350名の市民の参加を得て盛大に開催され、祖国復帰を祝う「日の丸パレード」も実施された。これまで長い間、左翼活動家達によつて、5月15日は、米軍基地を押し付けられた「屈辱の日」と位置付けられ、反米、反自衛隊、反基地闘争の象徴的記念日となつてゐたが、40年ぶりに今年初めて本来の姿である、沖繩の祖国復帰を祝う県民大会として開催することができたとのことである。

平和祈念公園内の「平和の礎」に刻まれた全戦没者の刻銘は、今年新たに36柱が追加されて総数24万1167柱となつた。この数は、沖繩本島とその周辺における陸海軍の戦死者及び沖繩作戦中の特攻戦死者、沖繩県の職員や一般住民の戦没者のほか、南洋群島等で戦没した沖繩県出身者も含めた全戦没者数ということであるが、マスコミが報道するのは、戦争の犠牲となつた一般住民の事例が殆どである。

一般住民の事例が殆どである。

一般住民の事例が殆どである。

一般住民の事例が殆どである。

一般住民の事例が殆どである。



来賓挨拶・小田村四郎元拓大総長



来賓挨拶・板垣 正元参議院議員



学生代表挨拶・上野竜太郎実行委員長

靖國神社において、これら沖繩殉國学
徒の慰霊顕彰祭を斎行して今年第56回
目を迎えた。御遺族や関係者の高齢化
に伴い、参列者も漸減しており、特に

今日、沖繩戦は多くの住民を巻き込
んだ無謀な戦闘と評価付けられ、住民
の犠牲の面を強調する風潮が強いが、
圧倒的に不利な状況下にあつて、将兵
はよく勇戦敢闘し、官民また率先協力
してよく奮闘し、身命を賭した3箇月
にわたる抗戦により、本土防衛のため
の防波堤としての重任を全うした、そ
の尊い英霊の顕彰とその史実の継承こ
そが大切なのではないか。

戦後67年を経た今日なお現地沖繩の
人々の心には強烈な思いが染み込んで
おり、この日現地の慰霊追悼行事は、
摩文仁だけではなく、各地の慰霊碑、
就中、各戦没従軍学徒の碑でも行われ
ているが、中央における沖繩戦戦没者

立第一・第二・第三の各中学校、同工
業・農林・水産、市立商業学校、私立
開南中学校の9校から1880余名が
「鉄血勤皇隊」及び通信隊に編入され、
半数は第一線の戦闘に、半数は野戦築
城に従事した。4月1日の米軍上陸以
来、これらの少年兵が、爆雷を抱いて
米軍戦車に体当たりを敢行する壮烈な
光景が各地区の戦場で見られたが、
5月中旬首里城の急を救おうとして
「学徒斬込隊」が志願編成され、50余
名が一体となつて敵陣に突入し、壮烈
な戦死を遂げた事実はその代表的なも
のであつた。

女子学徒の場合は、「ひめゆり学徒
隊」として有名であるが、それは沖繩
師範学校女子部と県立第一高等女学校
を「姫百合学舎」と呼んでいたのに因
んだもので、その外、県立第二高等女
学校の「白梅学徒隊」、同第三高等女
学校の「名護蘭学徒隊」、同首里高等
女学校の「瑞泉学徒隊」、私立昭和高等
女学校の「梯梧学徒隊」、私立積徳
高等女学校の「積徳学徒隊」の7校か
ら動員された従軍看護婦は総数約
540余名に及び、各戦線において、
弾丸雨注の中、健気にも身を挺して負
傷兵の看護に当たり、幾多の悲痛なる
哀話を綴つたが、中でも6月18日には、
陸軍病院は解散となり、女学生の動員
も解除されたので、伊原の洞窟にあつ
た第三外科病院では、女学生が従軍服
を脱いで学生服に着替え、解散式を済
ませた瞬間、米軍の急襲馬乗り攻撃が
加えられ、全員殆ど脱出の余裕なく、
一挙にうら若き女学生27名の命が奪わ
れた悲劇もあつた。その他戦死した女
学生の数は動員数の45%240数名に
及び、男子部の44%830余名と共に
動員学徒の約半数が尊い命を国に捧げ
て戦死した。誠に痛恨の極みである。

慰霊行事が、唯一、靖國神社における
本顕彰祭であるのは、些か寂しい思い
がする。ましてや、マスコミがこれを
報道することもない。

沖繩戦は、正に軍官民一体の総力戦
であつた。牛島満軍司令官の率いる第
32軍は、19年11月、3個師1旅のうち
精鋭第9師団を台湾に抽出され、兵力
補充のため17歳から45歳までの男子の
軍務徴集の外、中学校生徒を動員して
「鉄血勤皇隊」を組織し、女学校生徒
は「従軍看護隊」に編成して、敵上陸
時の戦闘隊員に投入した。中学3年生
以下の下級生は通信隊員として、上級
生は勤皇隊員となつて軍事訓練につ
き、20年3月には沖繩師範男子部、県

一昨年、昨年と、冒頭に述べた事情によつて参列者が減少した。それが今年

と力強く述べられた。

は倍増して約100名の参列を得たことは、誠に喜ばしい。しかも、そのうち、約半数は学生や若者など志を継ぐ者であることは一筋の光明である。

その後、学生代表により、沖繩祖国復帰40周年記念大会への参加報告や、現地学生との交流、慰霊碑巡拝等の報告、感想や決意の披瀝等があつて、第一部は非常に感銘深く傾聴した。

第一部の「殉國沖繩學徒をお偲びする集い」では、御來賓の小田村四郎元

第二部の式典は、靖國神社拜殿において斎行され、国歌斉唱、修祓の儀、

拓殖大学総長から、沖繩祖国復帰当時の現地及び国内外の情勢や復帰関連業務の企画推進を担当された際の苦勞話等を披露された他、沖繩戦が本土防衛

献饌の儀、祝詞奏上等の神儀、御遺文奉読、御遺詠奉誦と進み、学生代表により感銘深い祭文が奏上された。

と終戦処理に果たした意義等について強調された。同じく御來賓の板垣正元

次いで、参列者から奉呈された献歌奏上があり、「国の鎮め」の奏楽のうち、参列者全員、御本殿に昇殿し、

を主催してこられた金城和彦先生の父上の金城和信先生が、二人のお嬢さんをひめゆり学徒隊で亡くされておられるが、戦後、沖繩遺族会の事務局長、

玉串を捧げて拝礼し、式典は滞りなく終了した。(飯田正能記)

御遺文・御遺詠(一部)

○小渡壮一命 沖繩県立第一中学校

会長として、米軍の厳しい規制の中、

鉄血勤皇隊

遺骨収容や戦没者の慰霊・顕彰に献身

重砲隊、真壁にて戦

されたこと、その御意志を継いで金城

球九七〇〇部隊野戦

和彦先生が戦没者、特に殉國學徒隊の

死 当時十七歳

慰霊・顕彰に尽力されたことを讃えら

御両親様

れた。また、金城和彦先生の教え子で

どうか健在であつて下さい。私も今

ある長谷川氏が、先生の教えられた殉

度鉄血勤皇隊に入り、郷土沖繩に上陸

国の精神、個を捨てて潔く国のために

した敵と戦ひます。しっかりとやります。

捧げる誠の道こそ、大和魂の発露であ

御安心ください。萬一私がか戦死した時

り、若い人々にこの大和魂を連綿と継

は、よくやつて呉れたと思はれて、決

承していくことが我々の責務である、

して嘆く様なことはしないで下さい。

最後に御両親様の御健康と御發展をお祈り致します。さやうなら。

公の時がやつて来ました。しっかりとやります。

身はたとひこの沖繩に果つるとも

お母様。私の身體はすべてお國に捧げたのです。その身體を私は大事に磨き上げ、國のためにつくします。男でも女でも、詩にあります様に「國を思ふ道に二つはなかりけり」で、忠孝の信念に變りはありません。私の身體は國が保証して下さいます。ですからどうぞ、何の心配もなさらないで下さい。

○大嶺美枝命 沖繩県立第二高等女学校・白梅学徒隊

散るべき時には、立派な櫻花となつて散る積りです。その時は、家の子は「偉かった」と賞めて下さいね。(中略)

お母様

これから私は立派な従軍看護婦として、お國のために参ります。

いよいよ私達女性も、學徒看護隊として出動できます事を、心から喜んで居ります。お母様も喜んで下さい。

お母様、くれぐれもお身體を大事にされて、善ちゃん、弘ちゃんと明るく朗らかにお暮し下さるやうお祈りします。

私は「皇國は不滅である」との信念に燃え、生き伸びて来ました。軍と協力して働けるのは、いつの日かと待つて居りました。いよいよそれが私達に報ひられたのです。何と私達は幸福でせう。大君に歸一し奉るに當つて、私達はもつともいい機會を与へられました。しっかりとやる心算で居ります。

お母様は女の子を手離して、御心配なさる事でせうが、けつして御心配はなさいませぬ。私は優しいお母様の暖かいふところの中で、いつも可愛がられてすすくと伸びて参りました。私

お國に御奉公する覺悟で居ります。

最後に、一家の御健康をお祈り致します。

軍醫のお教へ、先生のお教へを學び、友と固く手を取り合つて、懸命にやつてゆく心算で居ります。いよいよ御奉

大君の御旗の下に死してこそ

お國に御奉公する覺悟で居ります。

人とな生まれしかひはありけり

お國に御奉公する覺悟で居ります。

君のため何かをしまむ若櫻

お國に御奉公する覺悟で居ります。

散つて甲斐ある命なりせば

お國に御奉公する覺悟で居ります。

お國に御奉公する覺悟で居ります。

お國に御奉公する覺悟で居ります。

平成24年度
 豫科練雄飛会戦没者慰霊祭

評議員 小倉 利之

平成24年度豫科練雄飛会戦没者慰霊祭が、去る4月4日、靖國神社で斎行されました。

靖國神社の桜は、数日前に開花宣言があつたばかりで、まだ3部咲き程度でした。前日に春の嵐が吹き荒れ、慰霊祭はどうなることかと心配されましたが、当日は、九段下駅の階段を上ると、靖國神社の大鳥居の向こうに、桜の薄桃色が映え、どこまでも澄んだ青空にはためく日章旗が見えました。素晴らしい雰囲気、英霊もさぞお喜びになるであろう慰霊祭が斎行できるものと確信いたしました。

昨年は東日本大震災の影響で、境内の花見の宴が自粛され、閑散としてい



ましたが、この日は午前中から例年どおりの盛り上がりを見せていました。天候に恵まれて、参列者の出足も順調でした。参集殿には、御遺族を始め、御来賓、豫科練出身者、有志等約250名が集まり、小林和夫会長の御挨拶と担当者の説明を受けました。

慰霊祭は、12時から例年どおり、次の式次第に則つて粛々と進められました。国歌斉唱、修祓・献饌・祝詞奏上、祭文奏上(会長)、献歌(合唱「海行かば」)、玉串奉奠、黙祷(奉奏「国の鎮め」)

豫科練雄飛会は、昭和33年3月、生存者在京同窓生が集い、先の大戦において、ひたすら祖国と民族の安泰と繁栄を願いつつ、北は凍て付く北洋から、灼熱身を焼く南の空に海に、花も蕾のままに散華された同窓生の慰霊・顕彰を続けてこられました。同窓生1万

8564柱の御霊に対し、慰霊の誠を捧げるとともに、その史実を正しく後世に伝えて顕彰すべく、本事業を立ち上げてより、今年で54年目を迎えたこと、慰霊祭には毎年、多くの人が集まり、会員総員が心を込めて、慰霊・顕彰に尽力しておられることは、誠に素晴らしいことだと思ひました。

小林会長は祭文の中で「本年は、雄飛会会員が全員、傘寿を超える超高齢者集団となりますが、豫科練生時代の教程や戦歴等に長短はありますが、同じ道を歩んだ同志で志を持って、同じ道を歩んだ同志であります。あの戦後間もない苦難の時代、多くの先輩があらゆる困難を乗り越えて立ち上げられた、尊い伝統を誇る豫科練雄飛会であります。この設立の、純粹にして崇高なる精神は、確りと心に留め、会員の絆を強めつつ、力を合わせ、生ある限り、精進することをお誓い申し上げます」と誓われました。

慰霊祭は滞りなく終了し、靖國会館前で総員による写真撮影を行った後、同会館2階において、招魂観桜祭が実施されました。

海原会・平野理事は、御祝辞の中で「東日本大震災で、日本人の強い絆は災害からの復旧・復興に大いに役立った。それにも増して豫科練の第一期から第24期までの絆は、この大

震災で日本人が見せた強い絆よりも、もっともっと真に強いものであると感じました」と話され、皆さんの共感をいただきました。

献杯は、豫科練1期生の伊藤進相談役の発声で行われました。「出撃時は常に同僚と『靖國で逢おう』と声を掛け合つて出発いたしました。本日も、この気持ちで献杯を行いたいと思ひます」と述べられました。

御遺族の方とお話をする機会を得ました。辻猛様は、辻始様(乙飛14期出身)の弟様で、辻始様は、昭和18年7月24日、御前崎沖で敵潜水艦の攻撃中に不時着、戦死されたとのこと。中学3年生の辻猛様の双子のお孫さん(女子)も参列しておられました。お二人は、昨年も自発的に参列されたとのこと、靖國神社にお参りしようとする気持ちのない人が多い中で、素晴らしいことだと感心いたしました。

我が国の存立のため、身をもって難局に殉じた幾多の同胞の尊い献身と犠牲に対して、敬意と感謝を捧げることが、国及び国民として当然の務めであり、この中学生を我々は見習うとともに、英霊の慰霊・顕彰、会員の勧誘について、若い人々に注目して、今後どのように継承していくべきかを考える必要性を痛感いたしました。

い局面での、特別攻撃隊の最高指揮官であった菅原中将の御息息として、恐らく二度と同様の立場に置かれる者はないと思われる人生ですが、その歩んで来られた姿は、誰が見ても感激するであろう立派な、美しい生き様であったと思ひ返すところであります。

思えば12年前、グラントヒル市ケ谷のコーヒールームで、菅原さんから、本会理事への就任を要請された時のことを思い出します。山本会長と相談の上で要請していること、自身「菅原道大」の息子であること、死ぬまで自身は関わっていくが、続く世代への継承が必要なこと等を縷々熱く語られたことでした。そして今、正に語られたとおりの、誠意溢れる見事な人生を私どもに示して、大きな大きな感動を与えて黄泉路へ旅立たれました。

菅原さん、あなたの生き様は、私どもにとって、残された人生に大変美しい支えを残していただきました。心から尊敬の誠を奏上申し上げます。有り難うございました。 合 掌

●菅原道照顧問追悼の記

評議員 水町 博勝

菅原道照顧問の突然の訃報に接し、謹んでお悔やみ申し上げます。

私が初めて菅原顧問にお会いしたのは、10年前、防衛省市ヶ谷基地内のメモリアルゾーンにある全陸軍航空部隊の「碑前祭」を、航空自衛隊のOB会である「つばさ会」が引き継ぐことになるので、当時「つばさ会」の副会長をされていた杉山蕃・現当顕彰会理事長から、父親が陸士出身(41期)であつた私に担当してほしいと伝えられた時でした。

当時「碑前祭」を執行していた「航空碑奉賛同人会」の事務局長をされていた菅原顧問に、グラントヒル市ケ谷でお会いし、「失礼ですが、菅原中将



の御息息でいらっしゃいますか」とお尋ねし、「私の父は、菅原司令官のもとで参謀をしておりました」とお伝えし、偶然の縁にお互い驚きを覚えまし。その後、その2年後の第28回「碑前祭」の後に、「航空碑奉賛同人会」の岩宮満会長(陸士47期)から「つばさ会」の杉山蕃会長に継承されました。

航空碑は、菅原中将の筆になり、陸軍全航空部隊の戦死者・殉職者の鎮魂の碑として、また、その偉業を後世に語り継ぐべきものとして厳然と建てられています。

その後「碑前祭」を担当して8年を



経過しましたが、菅原顧問を始め陸士61期の方々にはご協力をいただきました。菅原顧問は、昨年まで欠かさず出席されていたのですが、今年、同期の志賀昭夫様、原田太郎様と共に案じていました。上掲の昨年の「碑前祭」の陸軍関係者8名の写真の中央が菅原顧問です。また、私が特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会に入会したのも、菅原顧問のお誘いによるものでした。

瀬島龍三元会長から山本卓真前会長に交代される時、虎ノ門の事務所において、当時の菅原専務理事から会わせてい方がおられると言つて、瀬島会長の元に案内されました。私事ですが、瀬島龍三氏の著書で、氏が歩まれた波瀾万丈の人生の回顧録『幾山河』に、氏が大本営作戦参謀の時、3期先輩の主務者であつた私の父の補佐をしながら作戦計画の策定(昭和15年)作業を覚えた、と書かれていたのを思い出しました。その頃のことでしょうか、氏が父の自宅に來られ、母の料理を食べながら、飲み交わしていたとの話を、懐かしむように詳しく話されました。氏の記憶力の素晴らしさに驚かされました。誠に光栄な機会を作つて頂きました。

2年前に転居した際、整理をしていて父の書類が出てきましたが、その中

に世田谷観音寺特攻平和観音奉賛会の資料綴りがあり、特攻平和観音開眼式次第など父の自筆の資料などがありました。昭和28年頃の特攻平和観音奉賛会発起人の菅原道大会長によるガリ版刷りの案内状など、最初の頃の慰霊の状況を垣間見ることができましたし、菅原顧問にもお見せしたかったものでした。私にとって当顕彰会に入会していなければ知り得なかつたことです。導いていただき、感謝申し上げます。有り難うございました。

菅原顧問は、父上の遺志を継がれ、特攻隊戦没者の慰霊顕彰のために十分尽くされました。天国で、父上、兄上とその後の事を語られているのではないのでしょうか。御冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌

田中賢一著・私家版
詩歌集『早莽の声(二)』より

「本冊子は自作の詩歌集である。我が詩歌集と掲げておきながら、先人の詩歌をもって紙面を埋めているところが多いが、各項目に見合う詩歌を、蔵書の中から探し出して掲げたまでのこと、探すことが作ることに通ずると思ふ。(平成24年3月起稿)」

◇ ◇ ◇
○平成24年3月11日、天皇、皇后両陛下には、東日本大震災一周年追悼式に御出席、お言葉を述べられた。

大震災の 一とせ後
玉の緒失せし人々の
なごめの祀り行はれ
すめみま臨み給りぬ

そのお言葉の端々に
み心溢れしきしまの
伝わる心ここに見る

民の籠を 氣遣いし
みかどの心今ここに
復興 念ず 宸襟に
応えるものぞ我ら皆

◇
○天皇陛下の東日本大震災以降の主な御活躍(産経新聞記事より)

平成23年

3月15日 お住居の御所で自主停電

16日 テレビで国民にお言葉を述べられる。

30日 東京武道館(足立区)に被災者御見舞い。

4月8日 埼玉県加須市の避難所を御見舞い。

14日 千葉県旭市の被災地を御訪問。

22日 茨城県北茨城市の被災地を御訪問。

27日 宮城県の南三陸町など被災地を御訪問。

5月6日 岩手県の宮古市など被災地を御訪問。

11日 福島県の相馬市など被災地を御訪問。

7月27日 静養先の栃木県那須町で避難所のホテルを御訪問。

8月8日 東京都板橋区の避難所がある団地を御訪問。

11月6日 気管支炎のため東大病院に御入院。24日御退院。

29日 東日本大震災消防殉職者等全国慰霊祭に御出席。

平成24年
2月18日 冠動脈バイパス手術を受けらる。3月4日御退院。

3月11日 東日本大震災一周年追悼式に御出席、御言葉を述べ

らる。

御訪問先の避難所では、皇后陛下と共にひざまずかれて被災者を慰め、激励なされた。また、犠牲者の出た所では、深々と黙祷を捧げられた。

○テレビに映った津波の様を御覧になられて
御製

黒き水うねりて広がり進み行く
仙台平野をいたみつつ見る

被災地に寒き日のまた巡り来ぬ
心にかかる仮住まひの人

◇
自作
犠牲者に哀悼捧ぐすめらぎの
み心とふと我がおおよしま

防災の職に殉ぜし人々に
寄せるお言葉涙流るる

ボランティア人達にまで宣まいし
至れる御心限りなきかな

世界中多く人の寄せられし
熱き心に感謝せられぬ

平成24年度 戦艦「大和」を旗艦とする 艦隊戦没者「徳之島慰霊祭」 に参列して

専務理事 藤田 幸生

毎年、戦艦「大和」を旗艦とする特攻艦隊戦没将士の慰霊祭に、当顕彰会の代表を送っています。今年も、伊仙町と株式会社さくらツアーが企画した「徳之島慰霊祭『心の旅』」に参加しました。

ツアーは、4月6日～8日の2泊3日の旅で、北海道始め全国各地から、艦隊戦没者の御遺族、戦友、及び「富山丸」の御遺族など十数名が参加されました。

「富山丸」は、四国の陸軍部隊を沖繩に輸送中、昭和19年6月29日、徳之島沖において、米軍の潜水艦により撃沈され、3724名の犠牲者が出ました。その慰霊碑が、徳之島町の「なごみの岬公園」にあり、島に到着した6日の夕刻、私達一行のみで参拝し、慰霊祭を行いました。

今年の「徳之島慰霊祭」は、第45回目になります。慰霊塔の建つ犬田布岬は、例年になく天候に恵まれ、晴天で暖かく、風も穏やかで、海も空も青く

澄んでいました。

慰霊塔は、2年前に修復され、潮風の強い、岬の広い芝生の上に、海をバックにして「大和」の艦橋と同じ高さで聳えていました。「大和」が沈んだ時刻に合わせて黙祷を捧げ、行事は神式で進められました。全国から御遺族を始め400余名が参加しました。

私は請われて、慰霊祭で、英霊に対し、次のような趣旨の「御挨拶」を申し上げます。

「大東亜戦争終戦から67年が経ちます。皆様方は、昭和20年のこの日、この時刻に、帝国海軍最後の聯合艦隊水上特攻部隊として、目の前に広がる東シナ海において、日本の安寧と将来の発展を期して、愛しい人達の幸せのために、魁となって戦い、散華されました。今ここで平和穏やかなうちに、皆様方を偲び、このお祭りを齎行できずとも、皆様方のお陰であります。心から感謝申し上げます。

戦後私達は、この戦争について、真剣に向き合うことを避けてきました。そして、国の義務とも言える戦没者の方々の慰霊顕彰も、十分に実施してきたとは申せません。

歴史を素直に緋けば、この戦いは、世界史上大変重要な意味を持ち、大きな時の流れの中で、様々な要素が重な

り合って起こったことが分かります。

我が国は、明治維新における西洋諸国からの圧力に耐え、国として、民族の独立と尊厳を守り通してきました。その我が国にとってこの戦いは、明治維新に連なる生き残るための必死の戦いだったのです。即ち、世界的な見方をすれば、日本はこの時期、民族としての発展期を迎えていました。その勢いは、生物的、物理的に国内に溢れ、その活路を国外に求めざるを得ない状況でした。国外に移住した人々は、その行った先々で日本人として生きて優れた能力を発揮しました。残念ながらそれは、その地の人々に「生活を脅かすもの」として受け取られてしまいました。このように日本は、西洋からは警戒され、東洋の幾つかの国からは疎まれる結果ともなったのです。このことが、この大戦の原因でした。

アなど、その他多くの東アジアの国々は、独立を果たしてきました。西洋諸国による東洋植民地支配終焉のきっかけとなったのです。皆様方の精神は、今なお世界から注目され、心ある人々から高く評価され、感謝尊敬されております。

私は、サイパン島に約9日間の旅をしました。10回目であり、そこで慰霊について思索を重ねてきました。玉砕の島サイパン島のバンザイクリフ、スーサイドクリフ、旧アスリート飛行場等に立ち、当時のことを思い浮かべました。空を飛ぶ野鳥も、珊瑚礁を美しく彩る熱帯魚も、戦争当時生きていたそれらの子孫です。当時と変わらない自然も美しく、オリオン星座など降るような星空です。それらを眺めながら思索にふけりました。英霊の方々の声が聴こえるようでした。玉砕の地に建つ慰霊碑の前に佇めば、ここでも「忘れないで欲しい！」という多くの英霊の方々の声が聴こえてくるように感じました。これは、テニヤン島、マバラカット基地跡、レイテ島、コレヒドール島、トラック島などの戦跡等を訪ねた時と同じでした。

慰霊の原点は、皆様がどのような戦いをして散華されていたのか：「その事実を忘れないこと」だと思いまし

た。そしてその中には、御遺族の悲しみ、御苦労も含まれます。

その時生起した事実を知ると、国難に殉じた皆様に「感謝する気持ち」が自然に湧き上がってきます。それが、最も大切なことだと思います。

この感謝の気持ちが湧いてきますと、次には「今の自分は、皆様に恥ずるところはないか」、「皆様方の想いや期待に十分応えているか」という気持ちが込み上げて参ります。命を捧げて任務に赴いた皆様方を思うとき、私達は「日頃の自分自身の生き方を反省し」、本来の日本人らしい生き方をしなければならぬことに気付かされるのです。そして、皆様方が望んでいた「日本の再生に努力をしていくこと」が、最終的な、本当の意味での慰霊顕彰になるのではないかと思うに至りました。

これこそが、これからの慰霊の真柱になるのではないのでしょうか。

そしてまた、この気持ちが震災復興最中の今、我々日本人一同に必要な、そして求められている心構えではないかと思えてならないのです。

終わりに、私達が、これから生きていく上での真柱は、①皆様のことを忘れないこと、②皆様に感謝すること、③皆様に恥じぬよう、日々真摯に生き

ること、でありましょう。

「やすらかに！ ありがとうございませす！ つくしますす！」であります。この思いを胸にして、これから努めてまいりたいと思います。

在天の御霊、どうか、安らかにお眠りください。そして、私達をお守りくださいとにも、お導きください。」

徳之島の慰霊祭は、大久保伊仙町町長を中心とした実行委員会が、地域を挙げて実施しています。西犬田布婦人会、天城小学校金管バンドなどの参加は、地元若男女によつて支えられているという一つの象徴でもあります。また、砂糖黍の搾り汁を煮詰めて黒砂糖を作る実演をし、お土産に参拝者に配布しておりました。今後とも、徳之島全体が一つになって、この慰霊祭を継続されることを切に願うものであります。



戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊碑

○天号航空作戦計画

比島決戦で海空戦力の大部を喪失した日本としては、前方要地では持久作戦を行ってその間に再建した戦力で本土決戦をするのか、航空戦力の発起が容易な前方地域で最後の決戦をするのが問題であった。

当初消極的であった海軍は、航空戦力再建の目処が立つとともに、強く前方決戦を主張したが、本土の防衛を無視して全力を前方に注ぎ込むことに徹することもできなかった。また、急遽再建しつつあるとはいえ、量質両面で航空戦力の劣勢は避け難かったので、敵攻略部隊の近接までは極力我が戦力を温存した後、航空及び水上の特攻攻撃で敵を撃破することを主眼とした。攻撃目標を撃破の比較的容易な上陸船団に絞るか、敵戦力の中核である空母機動部隊を狙うかが問題となったが、海軍航空部隊は機動部隊を、陸軍航空部隊は上陸船団を目標とすることとなった。

また、統一運用を容易にするため、陸軍の第六航空軍を聯合艦隊の指揮下に入れることとした。防勢作戦の弱みから、直路沖縄への侵攻の可能性が強いとは思いつつも、台湾あるいは南支沿岸に

まず侵攻することも考慮せざるを得なかった。

○天号作戦の発動

連合軍は3月26日慶良間列島に、4月1日沖縄本島に上陸を開始したが、先の九州空襲とその反撃で戦力を消耗していた我が航空部隊の反撃は兩垂れ的で、水上特攻も制され敵は上陸に成功し、北・中飛行場を占領した。4月6日からは天号作戦計画に基づく航空総攻撃が開始された。これは菊水作戦と呼ばれ、陸・海軍特攻機約2000機を含めて第10次まで続行された。

特攻機の攻撃は、敵に大きな脅威を与え、将兵の精神錯乱や戦闘中の指揮官交代まで生じさせたが、連合軍は沖縄基地への防空戦闘機の配置やピケット艦艇等によって窮地を脱した。

日本軍は、関東等からも航空部隊を転用して航空攻撃を続けたが、やがて戦力を消耗し、航空攻撃は逐次減衰した。4月6日には戦艦大和以下の海上特攻が、5月24日には義烈空挺隊による敵飛行場への強硬着陸が行われたが大勢は覆せなかった。

(昭和20年4月6・7日～6月22日)

第六航空軍		第八飛行師団		小計(陸軍)		合計	
投入機数 (特攻機数)	損耗機数	投入機数 (特攻機数)	損耗機数	投入機数 (特攻機数)	損耗機数	投入機数 (特攻機数)	損耗機数
209 (118)	138	28 (28)	26	237 (146)	164	699 (355)	335
173 (90)	97	19 (8)	6	192 (98)	103	392 (202)	205
105 (50)	63	2 (1)	2	107 (51)	65	498 (196)	182
111 (36)	52	53 (26)	29	164 (62)	81	317 (131)	121
95 (50)	61	54 (34)	38	149 (84)	99	381 (196)	159
325 (91)	144	203 (108)	104	528 (199)	248	2,781 (631)	609
1,018 (435)	555	359 (205)	205	1,377 (640)	205	5,068 (1,711)	1,611
79 (40)	48			79 (40)	48	217 (104)	109
106 (20)	38	5 (5)	5	111 (25)	43	445 (123)	88
71 (39)	46			71 (39)	46	292 (85)	80
71 (31)	36			71 (31)	36	245 (46)	59
						257 (68)	54
292 (96)	102	183 (83)	59	475 (179)	161	1,328 (256)	257
619 (226)	270	188 (88)	64	807 (314)	334	2,784 (682)	647
1,673 (661)	825	547 (293)	269	2,220 (954)	1,094	7,852 (2,393)	2,258

○沖縄作戦関係の特攻—未帰還機

作戦段階別	海軍機	陸軍(第6航空軍)	同(第8飛行師団)	合計
慶良間上陸以前	119機	—	—	119機
～本島上陸以前	21機	—	32機	53機
菊水作戦開始前	40機	17機	35機	92機
4月6日～11日	226機	126機	33機	388機
4月12日～5月3日	303機	239機	47機	589機
～地上戦闘終末	258機	276機	74機	608機
7月～8月	52機	—	—	52機
合計	1019機	661機	221機	1901機

沖縄航空作戦における陸海航空部隊の投入並びに損失機数表

区 分	月 日	第五航空艦隊		第一航空艦隊		小 計 (海軍)	
		投入機数 (特攻機数)	損 耗 機 数	投入機数 (特攻機数)	損 耗 機 数	投入機数 (特攻機数)	損 耗 機 数
第一次 総攻撃	月 日 4. 6・7	413 (201)	162	19 (8)	9	432 (209)	171
第二次 総攻撃	〃 12・13	179 (92)	101	21 (12)	1	200 (104)	102
第三次 総攻撃	〃 16	375 (132)	110	16 (13)	1	391 (145)	111
第四次 総攻撃	〃 21・22	111 (49)	36	42 (20)	5	153 (69)	41
第五次 総攻撃	5. 4	195 (75)	49	37 (37)	11	232 (112)	60
4. 6～5. 4 小規模攻撃		1,963 (373)	308	289 (89)	53	2,252 (462)	361
計		3,267 (922)	771	424 (149)	80	3,691 (1,071)	851
第六次 総攻撃	5. 11	137 (64)	61			137 (64)	61
第七次 総攻撃	〃 24・25	334 (98)	45			334 (98)	45
第八次 総攻撃	〃 27・28	221 (46)	34			221 (46)	34
第九次 総攻撃	6. 3・7	161 (6)	20	13 (9)	3	174 (15)	23
第十次 総攻撃	〃 21・22	234 (54)	54	23 (23)		257 (77)	54
5.11～6.22 小規模攻撃		772 (34)	70	81 (43)	26	853 (77)	96
計		1,860 (293)	284	117 (75)	29	1,977 (368)	413
総 計		5,127 (1,215)	1,055	541 (224)	109	5,668 (1,439)	1,164

○主要な航空戦の交戦兵力と損害

時 期	名 称	日本側兵力	日本側損害	連合軍兵力	連合軍損害
3.18～21	九州攻撃に反撃	第5航空艦隊と第6航空軍 約700機	173機喪失 (内特攻115)	機動部隊4群	損傷空母6、駆逐艦1、潜水艦1
3.23～31	沖縄空襲に反撃	不明確	(特攻機54)	約1,000機	沈没駆逐艦1、損傷空母1、戦艦1、他28
4.7	沖縄へ海上特攻	戦艦1、軽巡1、駆逐艦8	沈没戦艦1、軽巡1、駆逐艦4	機動部隊4 約330機	不詳
4.6～7	菊水1号作戦	394機 (特攻215)	178機 (特攻162)		沈没駆逐艦他4、損傷空母1、戦艦1、他19
4.12	菊水2号	345機 (特攻103)	114機 (特攻69)		沈没駆逐艦1、損傷戦艦2、他11
4.16	菊水3号	415機 (特攻177)	127機 (特攻106)		沈没駆逐艦1、損傷空母1、戦艦1、他4
4.22	菊水4号	271機 (特攻70)	39機 (特攻32)		沈没掃海艇1、損傷駆逐艦他6
5.3	菊水5号	300機 (特攻136)	65機 (特攻61)		沈没駆逐艦3、損傷軽巡他7
5.11	菊水6号	175機 (特攻69)	53機 (特攻50)		損傷空母1、駆逐艦2
5.24～25	菊水7号	361機 (特攻107)	41機 (特攻32)		損傷駆逐艦7
5.27～28	菊水8号	208機 (特攻51)	46機 (特攻26)		沈没駆逐艦1、損傷駆逐艦他5
6.3～7	菊水9号	245機 (特攻22)	18機 (特攻5)		損傷駆逐艦1
6.21～22	菊水10号	255機 (特攻67)	53機 (特攻28)		損傷水上母艦2、駆逐艦1
4.1～6.30	菊水作戦以外の 沖縄航空戦	海軍機 約6900 陸軍機 約2000			沈没駆逐艦5、損傷空母8、戦艦6、巡洋艦2、駆逐艦71、他43

第36回都城市特別攻撃隊 戦没者慰霊祭に参列して

評議員 秋山 政隆

平成24年4月6日(金)、万葉の桜が咲き誇る宮崎県都城市市立都島公園(旧陸軍墓地)にある「都城特攻慰霊碑」(特攻振武隊はやて慰霊碑)の前で執り行われた「第36回都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭」に、当顕彰会を代表して参列させて頂きましたので、以下のとおりご報告いたします。

ここ都島公園は、都城市の市街地より南へ約1kmの地点に位置し、都之城址に程近く、見晴らしの良い小高い丘の上にある。公園の門をくぐると、広い駐車場があり、その奥の長い石段を上ると、公園全体の中心部を彩る桜並木があり、折しも満開の見事な咲きぶりを見せてくれていた。その左側の一角に、「都城特攻慰霊碑」は鎮座していた。昭和52年11月15日にこの碑は建立されたが、その経緯は、この地から沖繩周辺の敵艦船攻撃に飛び立って行った特攻隊第60振武隊長の御遺族から、ゆかりのこの地で肉親の鎮魂を折念したくとも忠魂碑がなくては出来ない、との一通の手紙を受けた都城市で

は、市長を会長として、「都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会」を発足させ、広く内外から寄せられた多額の寄附金によって、戦後32年、特攻戦没者の33回忌を迎える昭和52年に慰霊碑建立が実現したとのことである。

主碑は高さ約6m、中央部分に円形の削り貫きがあり、これは「火の玉」「打って一丸」を意味し、石よりも堅い信念を貫いた人々を象徴するものとされ、また特攻に使用された当時の最新鋭機・四式戦闘機「疾風(はやて)」を表徴する、主碑の前には当時の西飛行場の滑走路に使用していたアスファルトが踏み石として敷き並べられている。また、慰霊碑に隣接して、納骨堂が併設されており、支那事変以降の戦没者の遺骨(分骨)を個人ごとに納め、永代に祭祀する目的で、昭和13年、この地に建立され、旧陸軍歩兵第23聯隊の英霊9395柱が祀られている。

本慰霊祭の開催日は、都城特攻隊第一陣の出撃日である4月6日と定められ、都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会の主催で毎年執り行われているとのことである。

今回伺った4月6日の都城は、穏やかな春日を迎え、時折吹く風に桜の花びらが舞い、遥かに望む霧島連山と相まって当時の情景が偲ばれるような大

変印象深い日であった。

遡ること67年前、大東亜戦争末期、沖繩攻防戦の火蓋が切って落とされた昭和20年4月、南九州の陸海軍各航空基地からは日夜、特攻機が飛び立って行った。その頃、都城には特攻基地として、西飛行場と東飛行場があり、第一〇〇飛行団、四式戦闘機の飛行第一〇一、一〇二、一〇三の各戦隊及び特攻隊二隊が配備された。4月6日、都城基地からは、特攻第一陣となる第一特別振武隊の隊長林弘(陸士57期)少尉以下8名が、右翼下に250キロ爆弾を、左翼下に増槽(補助タンク)を搭載し、西飛行場から沖繩周辺の敵艦船を目指して南の空へ飛び立って行った。次いで4月12日、同じく第一特別振武隊柴田中尉、斉藤伍長の2名が続き、以後作戦は何度となく展開され、7月1日の第一八〇振武隊の新田祐天、宇佐美輝夫両伍長(共に少飛14期)が東飛行場を発進したのを最後に、沖繩への特攻作戦は終了し、17次にわたる作戦により、79名の特攻隊員が戦没した。この数は、九州方面から出撃した陸軍特攻隊戦没者の1割程度とのことであるが、都城特攻隊の特色として、特攻隊の編成人数に比して、敵艦船に突入した戦没者数の割合が高いこと、使用機種が全て当時の最新鋭機であっ

た四式戦闘機「疾風」であったことが挙げられる。

また、特攻機の掩護に当たっていた第一〇〇飛行団は、特攻機の掩護や沖繩基地の制圧等の厳しい任務により戦力を消耗し、5月25日の航空総攻撃で出動戦力を失い、これを補完すべく四式戦闘機の飛行第47戦隊が都城に配備され、特攻機の掩護任務に当たったが、特攻機と別れて帰路に米軍機の急襲を受け、3機が撃墜されたとのことである(当日配布の資料による)。

慰霊祭では、開式の言葉、黙禱に続き、冒頭に奉賛会会長で、都城市長の長峯誠氏より追悼の言葉として、戦後我が国は、また、本市においても、ひたすら国の再建と繁栄に努め、年々その成果を挙げて発展してきた。今現在は、戦後生まれが多数を占め、戦争の記憶も薄れつつあるところ、昨年は、東日本大震災の発生、また、本市においても新燃岳の噴火があり、自然災害の脅威を改めて認識したが、これ乗り越えて復興、発展すべく市民一丸となって活動した年でもあった。英霊達の遺された祖国愛を受け継ぎ、祖国、郷土の発展と恒久平和のため、一層の努力を誓い、英霊に対し、衷心より感謝の誠を捧げたい、と述べられた。

続いて、福岡偕行会の菅原道之会長



都城特攻（振武隊はやて）慰霊碑



都島公園（陸軍墓地）入口



都島公園桜並木



陸軍墓地納骨堂

（陸士57期）が祭文を奏上されたが、その中で、我が国の自存自衛のために立ち上がった崇高な精神と行動力、それは、日本人の魂に感動を与え続けるものである。東日本大震災における被災地日本人の行動は、世界の賞賛的となった。その底流にあるものは、復興と慰霊と、相通するものがある。更に近隣諸国情勢を踏まえて、国防の重要性が強く認識されつつある今日、かつて祖国の危急存亡の時に際し、敢然と身命を捧げて祖国と国民を守り抜くために散華された都城特攻隊、しかもその各隊の隊長が、陸士57期の同期生

であり、陸軍の伝統に基づき、立派にその任を果たされたことを誇りに思うとともに、心より感謝の念を捧げ、あなた方に守り続けられてきた祖国日本の平和を守るために、我々も努力を重ねる所存である、在天の英霊の安らかならんことを、との熱い誓いの言葉を述べられた。

続いて裏千家淡交会都城分会の皆さんによる献茶の儀、参列者による献花に続いて、都城市議会議長楡田勉氏による来賓挨拶、錦城会の皆さんによる献詠「弔特攻勇士」、都城詩道会の皆さんによる「戦没者追悼の詩」の後、

陸士57期生会、都城地区翔飛会の皆さんによる献歌「加藤隼戦闘隊」「海ゆかば」「同期の桜」の合唱があり、平和のメッセージとして、都城市立庄内中学校代表小島さん（三年生）が「平和を受け継ぐ者」と題したメッセージを朗読した。

続いて、陸上自衛隊音楽隊による演奏があり、最後に、遺族代表・飛行第一〇二戦隊金沢武要少尉の甥に当たる中村氏の挨拶で締め括られた。特攻慰霊祭の中でも都城慰霊祭は、掩護の任務に当たった方々も慰霊の対象ということに触れられ、また、亡き叔父の足

跡を辿り、アメリカの公文書館や戦死を遂げられた地、奄美を訪れた話、戦後の御遺族、肉親の深い悲しみについて、今の平和を守ること、変わらぬ慰霊への誓いをされた。

閉式の辞とともに散会となったが、関連団体に止まらず、地元都城市を挙げての大変印象深い慰霊祭であった。

最後に、今回貴重な機会を頂いた特攻隊戦没者慰霊顕彰会に感謝を申し上げます。

第53回出水市特攻碑慰霊祭 に参列して

評議員 及川 昌彦

会議員、商工会議所など50名程の和氣
藹々とした交流会でした。地元の方々
のアトラクションの後、壇上で同期の
桜を合唱して明日の慰霊祭の成功を期
して散会しました。

帯びながら本日の慰霊祭に特別な御支
援を賜り厚く御礼申し上げます。」と
自衛隊に対する熱い想いを述べられま
した。

黙祷ではモールス信号電燈で「ト連
送、突入音」を流し、638柱の冥福
を祈りました。「ト連送」と言われる
トの連続発信は突撃の意味、「ツ」
という連続音は、敵艦突入体当たり直
前まで電鍵を押し放しの状態である事
を示し、このツ音絶えた瞬間が自
爆した証となったのです。

平成24年4月16日(月)、出水市特
攻碑顕彰会(会長洪谷俊彦市長)主催
による第53回出水市特攻碑慰霊祭が出
水市特攻碑公園にて開催されました。
出水海軍航空隊は昭和18年4月に操縦
術の練習航空隊として発足しました。
その後、銀河部隊が進出して戦闘部隊
の基地となり、多くの特攻出撃が敢行
されました。

翌16日は10時45分に海上自衛隊鹿屋
航空隊のP-3C対潜哨戒機が上空を
3回慰霊飛行し、地上より「帽振れ」
発煙筒で応答しました。慰霊祭は、陸
上自衛隊国分駐屯地より儀仗隊・音楽
隊の支援、消防団による国旗・軍艦旗
掲揚で開式しました。進行は当会の会
員でもある竹添二雄副会長が担当され
ました。開式の言葉では「特に国防の
最前線で活躍されている陸海空の自衛
隊におかれては、近年にない緊張の中
に隊員の御派遣を賜り、感謝の外あり
ません。災害派遣という重大な任務を

音楽隊による演奏は「若鷺の歌」「月
月火水木金」「太平洋行進曲」「誰か
故郷を思わざる」の後、全員で「同期
の桜」を斉唱しました。洪谷俊彦出水
市長を中心に、海上自衛隊、陸上自衛
隊、消防団、御遺族、戦友、市民が一

今回は市長主催による前夜祭である
交流会から参加させていただきまし
た。御遺族、元隊員、自衛隊鹿児島地
方協力本部、自衛隊父兄会、出水市議

隊、消防団、御遺族、戦友、市民が一

隊、消防団、御遺族、戦友、市民が一



慰霊碑前祭場



慰霊飛行に「帽振れ」をする参列者



儀仗隊に敬礼をする竹添氏



儀仗隊



交流会の一コマ



竹添二雄副会長と筆者

京都霊山護國神社に

「あ、特攻」勇士之像建立

事務局長 羽瀨 徹也

桜の満開のときも終わり、新緑の鮮やかな季節となったゴールデンウィークの初日に当たる4月28日(土)、京都霊山護國神社に「あ、特攻」勇士之像が建立されることとなり、その除幕式が、同護國神社の春季例大祭の日に合わせて、例大祭終了後引き続き執り行われた。

当顕彰会からは、藤田幸生専務理事と私が参列した。この京都霊山護國神社は、明治元年5月に明治天皇から、明治維新で殲れた志士を奉祀するために創建せよとの御沙汰が発せられ、これに感激した公家や諸藩が相計り、京都の霊山山頂に神社を創建したのが始まりで、日本初の招魂社となった。京都東山の麓にある護國神社の境内には、寺田屋事件で有名な坂本龍馬、中岡慎太郎、桂小五郎等の幕末の志士千三百五十六柱及び明治以降の郷土出身戦没者約七万三千柱の英霊が祀られており、更に境内には、靖國神社遊就館前に奉祀されているものと同様、立派な「パール判事顕彰碑」が建立されている。

京都霊山護國神社の木村隆比古宮司は、全国護國神社宮司の中で最も若い宮司さんであり、今回の建立奉納に当たっては、当顕彰会の藤田専務理事との間で、昨年の夏頃から電話やメール等で詳細な連絡調整が行われ、この日、建立の運びとなったものである。

この「特攻勇士之像」の建立奉納事業は、公益財団法人である当顕彰会の大きな公益目的事業の一つであり、平成19年4月13日に福井県護國神社に第1号が建立奉納されて以来、今回が11体目の建立奉納となった。

当日は晴天に恵まれ、今回の建立奉納にご協力頂いた「昭和の杜友の会」「関西白鷗遺族会」の他、御遺族や戦友の方々百名以上が参列されていた。11時から京都霊山護國神社の春季例大祭が斎行され、「あ、特攻」勇士之像の除幕式に出席される方の殆どは、この春季例大祭に参列されており、12時30分から引き続き執り行われた除幕式には、全員が護國神社拝殿から二十数メートル離れた境内の建立場所まで移動して行われることになった。

参列者代表が特攻像前に着座してから、木村宮司による修祓の儀が行われた後、昭和の杜友の会植田喜裕会長、当顕彰会藤田幸生専務理事、御遺族代表2名の4方によるテープカットに引

き続き、引き綱により白幕が下ろされると、燦然と輝く「あ、特攻」勇士之像が参列者の前に姿を現し、参列された方々も、偉大な凛々しい勇士之像のお姿に深く感動されてか、多くの方が手を合わせて拝んでおられた。その後、参列者代表により献花が行われた。

その後、この「あ、特攻」勇士之像を奉納した当顕彰会を代表して、藤田専務理事が、顕彰会の紹介及び事業について説明され、「長くなりますが」と前置きされた上で、「これからの特攻隊戦没者慰霊顕彰について」(会報「特攻」第91号10頁〜12頁掲載)の概要を説明された(後日、京都霊山護國神社のブログに「藤田様の御挨拶が非常に素晴らしかった」としてスピーチの要旨)が掲載されている。最後に「近畿特操会の碑」をバックにして、奄美大島出身の男女 アコーステックユニット「nana」による手話を交えての奉納歌「天人菊の丘」が、しみみりと三線のメロディーに合わせて歌われた。「・・・帰らぬ人を 待ち続

けて 風に静かに 揺れる天人菊：」という歌詞の部分などもあり、涙を流しながら聴いている方も多くおられた。この奉納歌の演奏をもって京都霊山護國神社における「あ、特攻」勇士

之像の除幕式は滞りなく終了した。その後参列者は、タクシーに分乗して、京都駅南口にある新都ホテルの懇親会場へと移動した。

懇親会では、関西白鷗遺族会の山田正克会長が司会進行を務められ、昭和の杜友の会植田喜裕会長により開会の挨拶と特攻像横の「副碑」の碑文(後掲)の紹介、京都霊山護國神社木村宮司の挨拶、元氣な御遺族・戦友の方々による「同期の桜」の斉唱もあり、また、除幕式の際に奉奏された「nana」の皆さんによる「天人菊の丘」が再度演奏された。

懇親会においては、初めてお目に掛かる方が多かつたため、名刺交換に終始したが、和氣藹々とした雰囲気の中にも、国の義務であるべき戦没者の慰霊顕彰が十分でないことを嘆く声や、日本の現状と再生を憂うる声などが多く聞かれた。今後とも当顕彰会を含めて、各種協力団体や有志による慰霊顕彰事業の継続発展をお互いに確かめ合うことができた有意義な懇親会となった。

なお、中でも司会を務められた山田正克会長の「関西白鷗遺族会」は、終戦直後の昭和21年11月、未だ混乱の続く焦土の東京・築地本願寺において、MPに取り囲まれた中で、第1回の慰

靈法を行って以来、昭和27年に社団法人「白鷗遺族会」となり、海軍飛行予備学生・生徒各期の遺族等が中心となって、百回を超える春秋の慰霊祭を靖國神社で実施していたが、平成8年5月に全国組織の社団法人を解散し、全国を13の地域に分けて慰霊事業を継承している団体の一つである。

「あ、特攻」勇士之像副碑「碑文」

「あ、特攻勇士之碑」

昭和二十年八月十五日の終戦の日から月日は経過してきた。この間、我が国は国民のたゆまぬ努力により、幾多の苦難を乗り越えて世界が驚異の目を向けるまでの復興を為し遂げ、今や世界有数の経済大国として、揺るぎない地位を築き、平和と繁栄を謳歌するまでに至った。しかし、この平和と繁栄は、



昭和の杜友の会会長 植田 喜裕
京都府会議員

先の大戦における数百万人もの戦死・戦病者をはじめ、数多の国民の犠牲の上に立っていることを忘れてはならない。とりわけ、大東亜戦争末期において、日に日に厳しくなる戦局の好転を期し愛する家族の待つ祖国の悠久の平和と最後の勝利を信じ、その礎たらんと二十歳前後の若者が一機一艇で敵艦に体当りする歴史に例のない必死の特別攻撃の任に就き、遠く南海の空や海に散華した。彼等の崇高なる精神と遺徳は、永く後世に伝えられるべきものである。彼らが身命に代えて守ろうとしたものは何か、この像は今を生きる私たちに問いかけている。

国民の皇室観

会員（陸士57期）石田 一

日本の足を器用に動かして歩き回っていた百足むかでがある時、そのことに疑念を抱いた。途端に足が絡まって動けなくなり、衰弱して死んでしまったという話がある。

日本が、「天皇を中心とした神の国である」という日本人の意識は、幕末までは全く動揺がなく、議論の余地はなかった。それが、明治開国によって、怒濤のごとく押し寄せた洋学を学んだ知識者たちが、このことに疑念を差し挟んだ。そのために、百足の話と同じように、国民の皇室観かみぎに翳が差し、以後、徐々に徐々に国運は衰退の一途を辿り、今日に至ったのではと思えて仕方がない。

しかも、終戦を機に、占領軍の示唆を受けて、古事記、日本書紀を追放、排除したことを、今もってそのままにして、正しい歴史教科書を使いたがらない風潮が未だに存在している事実を、一体、何と見るのであろうか。日本は弱気になっている。複雑な国際関係の渦中とはいえ、外国の圧力に怯えての度重なる国家としての意志決定の曖昧さを許してはならない。

そもそも、我々は時々刻々に、呼吸をするについて、空気存在を疑ったことがあるであろうか。空気を疑う余地はない。人間は空気を呼吸するように、「絶対」という物や事の中で、「絶対」とともに、絶対絶対に生きていかねばならない面が沢山ある。

明治憲法（大日本帝国憲法）は、その第三条に「天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズ」と決めた。現憲法（日本国憲法）は、それを第一条で「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く」とやつてしまった。占領軍が置き去りにした、この憲法を、いつまで、そのままにしておくのであるか。許せない事である。

国民一般の、皇室観の衰退、曖昧さを憂えている者の一人である。不祥事が多発して、問題の多い、紊乱する日本社会を清掃し、健全化、活性化を図るべき急所が、一に掛かつて、国民の皇室観の回復、確立にあるのである。因みに、「神の国」の「神」は、精神の神であり、日本は、「心の国」という意味である。日本は、「物の国」ではない。

平成24年度知覧特攻基地 戦没者慰霊祭に参加して

理事 衣笠 陽雄

平成24年5月3日、知覧特攻慰霊顕彰会（会長・南九州市市長・霜出勘平氏）主催の第58回知覧特攻基地戦没者慰霊祭が知覧特攻平和観音堂前で実施された。

今回本慰霊祭に当顕彰会代表として参加しましたので概要と所見を報告致します。

一 慰霊祭の概要

全国から800名以上という多くの参加者を得て、鹿屋からの慰霊飛行・国分自衛隊音楽隊慰霊演奏後から祭式は2時間に亘り厳かに、かつ整齐と実施された。祭式は開式のことばで始まり、献茶、一同合掌礼拝、黙祷、読経、参加者全員による焼香と続き、知覧特攻慰霊顕彰会会長の追悼の詞、特攻隊員遺族や元特攻隊関係者による慰霊のことばが順次述べられた。特に慰霊のことばでは益々の高齢化に伴い、生かされた者として御霊の慰霊を最後まで続ける覚悟について異口同音に述べられていたのが印象に残った。引き続き詩吟朗詠、錦城会により献詠が実施されたが、特攻隊員や御遺族の和歌の連続吟詠で感情の籠った名調子であり、心



打たれるものがあった。次いで慰霊電報披露、参加者全員による献花、献奏、南九州市長あいさつ、慰霊合唱、閉式のことば、最後に

一同合掌礼拝を以て慰霊祭は終了した。開始前降雨が心配されたが、濡れることなく全てを終了できたのも御霊の御蔭でしょう。



知覧特攻平和観音像

二 参加所見

●慰霊祭について

さすがに全国に名を知られるだけあって参加者は毎年800名から千名集まるとのこと、尚武の地とはいえ、特攻隊員の出身者が必ずしも九州だけではないことや他の慰霊祭の規模等を比較してもこの数は尋常ではない。又参加者数が非常に多いにも拘らず、高齢者を含む参加者全員による献花・焼香も整齐と実施されさすが58回の歴史が

為せる技かと思心した。これらは我々にとつての教訓として今後参考とすべき事項が多々あった。又ある関係者は参加者の高齢化が進み今年は特にその傾向が顕著であると話していたが、我々特攻隊戦没者慰霊顕彰会にも同じことが言える。今後も慰霊祭のみならず、会員募集等も若い人を対象としなければ組織そのものの衰退を見ることは明らかである。

●知覧特攻平和会館について

以前来た時より陳列物の増大・ビジュアル化・洗練された「かたりべ」等により特攻隊の意義を訴える努力がなされていた。特に適度な広さの講堂での視聴覚器材を活用した「かたりべ」による説明は、聞く人の心の琴線に触れ、涙なくしては聞けない程、洗練されていたが、この効果波及が全国から人を呼び込む源泉にもなっていると感じた。

知覧特攻平和会館参事・かたりべの

川床剛士氏との懇談で、この会館の訪問者は年間約60万人（平均約1400名/日）という信じられない訪問数に驚いたが、これまでに当会館関係者がそれなりの努力をされた結果だと思つた。観光という一面があるにせよ、官民が力を合わせてやればそれだけの結果は出せるのだと思つた。特に資料の収集努力については、遺品や資料等の収

集や調査員を全国に派遣して特攻隊全般に亘り全国の関係者から聞き取り調査を行い、正確な事実の把握に努めている事は体験者が消え行きつつある現状から時宜に適した施策であると思う。また、川床氏の話では、親に連れられた子供や高校生が修学旅行で訪問する等、明日を担う若者も多く、所見も立派なものを残しているようである。知覧は正に歴史・精神教育の国民学校のよ

うな地位にまで上ったのではと感じた。当顕彰会との関係については一つの組織となる事は難しいが、お互いの連携が必要である。川床氏も資料の正確性の為にも情報交換や双方のホームページのリンク等が必要ではないかと言われた。当顕彰会とはスタンスは異なるものの事実把握のためには連携が必要である。また、我が顕彰会は知覧や万世の様な展示スペースは靖國神社や万世の様な展示スペースは靖國神社で活動の基本方針が異なるが、英霊の顕彰と精神伝統の継承という目的はどの地にあつても不変であるので大いに交流を図るべきである。

●何度声高に特攻隊の崇高さや慰霊の

必要性を説いても、聞く者の心に触れるものが無ければ、それがその人の心に根付く様にならないければ一過性の物に終わってしまうだろう。

我が顕彰会は、知覧の様に一般市民に自ら足を運ばせ且つ効果的に視聴覚に訴える術は若干欠けるものの現在までの先輩会員のご努力による資料等資産は多々あり今後これらの財産の活用と積極的な活動により大いに成果は期待できるのではないだろうか。

今回の知覧慰霊祭に参加して得た成果を大いに参考に特攻隊戦没者慰霊顕彰会の一員として慰霊・顕彰活動を行って参りたい。(平成24年6月記)

第45回豫科練戦没者慰霊祭に参列して

評議員 及川 昌彦

平成24年5月27日(日)、公益財団法人「海原会」(横溝潔理事長)主催による第45回豫科練戦没者慰霊祭が陸上自衛隊土浦駐屯地(茨城県稲敷郡阿見町)にある武器学校内施設で実施されました。当会からは藤田幸生専務理事、小倉利之・秋山政隆各評議員及び金子敬志事務局員が参列しました。

式典は真夏のような強い日差しの中で陸上自衛隊勝田駐屯地施設学校音楽隊の伴奏による国歌斉唱、武器教導隊員による献火で始まりました。そして、高松宮妃殿下御歌奉詠、式辞、追悼の言葉、献花、武器学校校長による来賓挨拶と続き、参列者全員で若鷺の歌を奉唱しました。

地元婦人会による舞踊「若鷺の歌」



慰霊祭祭壇

も披露されて式典は無事終了。会場を武器学校大講堂に移して直会となりました。倉持富司男阿見町長の挨拶の後、壇上での音楽隊の演奏を聴きながら、会食となりました。あちらこちらで戦友同士が旧交を温める光景を目にしました。慰霊祭全体を通して、陸上自衛隊の支援の下に実施された、完璧な素晴らしい慰霊祭でした。

閉会后、我々企画委員会の研修として、小倉委員長の提案で、秋山企画委員と共に、『雄翔館』と『予科練平和記念館』を見学しました。『雄翔館』には豫科練戦没者の遺書、遺品約1700点を収蔵、展示されています。『予科練平和記念館』は、豫科練の制服である七つボタンをモチーフに七つの空間から構成された常設展示室と、図書の閲覧、館の収蔵資料などを閲覧できる情報ライブラリーなどがあります。厳しい訓練や教育の様子が分かりやすく展示されています。

(写真提供／秋山企画委員)

◇ ◇ ◇ 《記念館利用案内》 ◇ ◇ ◇

- *所在地 〒3000-0302
- *茨城県稲敷郡阿見町大字廻戸五番地一
- *電話 (029) 891-3344
- *開館時間… 午前9時～午後5時
- *休館日 … 月曜日
- *入館料 … 大人500円
- … 小中高校生300円
- *交通 … JR常磐線土浦駅西口からバス利用
- *ホームページ
http://www.town.ami.ibaraki.jp/yokaren/



直会会場



雄翔館

義烈空挺隊出撃67周年慰霊祭

会員 一 多喜雄

陸上自衛隊健軍駐屯地(熊本市東区)にある義烈空挺隊慰霊碑



健軍の義烈空挺隊慰霊碑

義烈空挺隊は、昭和20年5月24日18時40分、義烈空挺隊長奥山道郎陸軍大尉以下136名、それを輸送する第三獨立飛行隊長諏訪部忠一陸軍大尉以下32名合計168名が、廃止寸前の九七式重爆撃機、12機に搭乗・離陸、途中4機はエンジントラブルで不時着、残

りは米軍が占領していた沖縄中・北飛行場に向かい、超低空で進入したが、米軍の対空砲火を浴びて着陸寸前に撃墜されてしまった。1機は、北飛行場に見事胴体着陸、その位置は管制塔から75m位の距離であった。直ちに滑走路上や周辺にある航空機を次々に破壊、縦横無尽の活動を続け、北飛行場は数日間、使用不能に陥ったばかりではなく、北飛行場・第533夜間戦闘機隊司令官ケリー中将が戦死している。義烈空挺隊も玉砕、112名全員が戦死した空前絶後の特攻大作戦であった。



出撃67周年慰霊祭・牧名誉会長追悼の詞

碑は、昭和40年夏、義烈空挺隊が発進した旧健軍飛行場に建立されましたが、空港移転に伴い、昭和46年春、健軍駐屯地に移設されました。
出撃67周年慰霊祭は、5月20日、碑前において、健軍駐屯地司令・歩松陸将補、熊本借行会・三菱学徒動員会・熊幼会等各代表、一般市民等78名が参列して空挺同志会熊本県支部(支部長・園田郁夫)主催で開催されました。
式は無宗教で、まず献灯を行い、西部方面音楽隊の演奏で、国歌斉唱・黙祷と続き、追悼の詞を熊本借行会名誉会長牧勝美氏が「祖先より受け継ぎし



健軍駐屯地広報館入口に展示されている「義烈空挺隊玉砕之地」墓標(4代目)

尊きものを護り伝えん為には、何も顧みず死力を尽くして体当たりするが日本男児の本懐なり」と、南国沖縄に散った英霊に衷心よりの哀悼の言葉を捧げました。慰霊祭当日は天候に恵まれ、樹木も若葉が茂り、碑の後ろには落下傘が飾られ、一段と趣を増し、厳肅な中にも盛大な慰霊祭を挙行することができました。
直会では、この度、健軍駐屯地広報館に展示されることになった4代目墓標についての説明が行われました。玉砕の地・沖縄の北飛行場(現・読谷村役場付近)の御遺体が散乱していた現場を、当時の米軍の資料からピンポイントで掌握して、昭和47年に建てられた『義烈空挺隊玉砕之地』墓標。以来40年間、墓標は沖縄の厳しい風雨に晒され、4代に亘って日本の平和と後に続く者を見守って来ましたが、同地に中学校が建つことになり、撤去を余儀なくされました。新しい5代目の墓標



読谷に建っていた4代目墓標

は、現場から離れた位置ではありませんが、近くの畑の中にある航空機掩体壕脇に移設されました。お役目を終えた4代目の墓標は、出撃の地縁の熊本で保管したいと、駐屯地に陳情、この度の慰霊祭時に参列者に紹介いたしました。この度、健軍駐屯地広報館入口右側に義烈空挺隊コーナーが設けられ、4代目墓標はそこに展示されることになりました。広報館を訪れる人は必ずそこを通るので、英霊もきっと喜んで来訪者を迎えて下さるでしょう。同時に、人々の義烈空挺隊についての認識も高まるものと期待しているところです。

慰霊祭の参列者は、毎年少しずつ顔ぶれが変わっていますが、戦争を体験していない50代の一般市民の参列も増えました。英霊を尊び、御遺徳を慕い、祭祀を絶やさぬように、今後も慰霊祭は空挺同志会主催で存続させていきます。(全日本空挺同志会熊本支部会員)

『観音湯』の思い出

評議員 倉形 桃代

ご縁があって、熊本県所在の陸上自衛隊健軍駐屯地における義烈空挺隊慰霊祭に参列した。健軍飛行場は、義烈空挺隊が沖繩に向け発進した地であ

る。平成22年の早春、沖繩本島にある読谷飛行場跡に建つ『義烈空挺隊玉砕之地』を訪ねてから、発進の地にも立ちてみたいと強く思っていたところ、同年5月23日に行われる慰霊祭に参列される陸上自衛隊第一空挺団の御一行に同行させて頂けることになった。『平成の空の神兵』たる皆様と一緒に参りできるのは、何と光栄なことだろう！出発を前に、事前勉強の為たまたま手にした資料で、健軍駐屯地の近くに義烈空挺隊ゆかりの銭湯があると知った。お世話人である全日本空挺同志会熊本支部の一(かず)多喜雄支部長(当時)にも、もし宿舎までの道中で寄れるなら、是非その場所を訪ねてみたいとお願いをしたところ、慰霊祭前日の移動日に、義烈空挺隊ゆかりの地を研修しながら宿に行く計画を立てて下さった。陸上自衛隊健軍駐屯地・陸軍の健軍飛行場跡を研修して、最後に訪ねたのが『観音湯』である。

当時、飛行場にも入浴施設はあったが、わざわざこの銭湯まで足を運ぶ兵隊さんが多かったという。その頃は『健康湯』という名称で、女将である堤ハツさんが、訪れる兵隊さん達の面倒を見ておられた。中でも、特に逞しく凛々しい印象の義烈空挺隊員には、ハツさんも、何処か惹かれる部分があったのだら

う。親身になってお世話をされていた。隊員の方々も、ハツさんを母のように慕っていた。健康湯で過ごす時は、過酷な任務を忘れ、故郷に帰ったような温かな気持ちで寛げたに違いない。バスを降りて歩いていくと、銭湯への上がり口に小さな祠があり、普賢菩薩の石像と由来を書いた石碑が並んで建っていた。現在、その祠を守っているらしい幸子さんが、私達を笑顔で迎えてくださった。

普賢菩薩像と石碑は、戦後にハツさんが義烈空挺隊員の御霊を慰める為に建てたものである。出撃前に「私達には、もう不要になりましたから」と贈られたお金を基金に、ハツさんはこの普賢菩薩像を建てられた。毎日花を供え、御霊のご冥福を一心に祈られた。『観音湯』は、昭和57年に八十歳で亡くなられたハツさんの御息・建造さんが後を継いでおられたが、平成21年の秋、建造さんも永眠され、年末に店を畳んだ。現在は奥様・幸子さんが、一人でご供養を続けていらっしやる。

参拝時、一支部長が碑文を読み上げ、普賢菩薩像の由来を説明された。一行は献花・御参りをした後、幸子さんのご案内で、壁のモザイク画が美しい浴場の見学をさせて頂いた。戦時中と同じ内装ではないが、そこかしこに物語

を感じるような、そんな趣があった。当時のお話を聞かせて欲しいとお願いましたが、幸子さんはまだ堤家に嫁いでおらず、ハツさんから伝え聞いた話しか分からないとのことだった。

帰り際に、数名が代表でご自宅の仏壇に御参りをさせて頂いた。仏間には、ハツさんと建造さんのご遺影が飾られていた。「とてもお洒落で、美しい義母でした。」ご遺影は晩年のものと思われたが、心根が顕れているのだろう。幸子さんの仰るとおり、着物の似合う華やかで美しい方だと思った。

いよいよお別れの時になった。土産まで頂いて恐縮した一行は、口々にお礼を伝え、バスに乗り込んだ。私も一度、普賢菩薩に手を合わせ、心を込めて義烈空挺隊員の御霊の平安を祈った。そして、ずっと大切にご供養を続けて下さったハツさん・堤家の皆様の真心に敬意を表し、心からの感謝を捧げた。隊員の皆様にも囲まれた幸子さんのお姿に、ハツさんの面影が重なるように見えた。

走り出したバスに向かって、幸子さんが手を振って見送って下さった。バスが曲がって見えなくなるまで、ずっと手を振っていらっしやうた。ある隊員さんがポツリと「当時も、あんなふうに見えるって見送ったんだら

うなあ」とつぶやいていた言葉が、切なく心に響いた。

先月末に、幸子さんからお手紙を頂いた。「当時はまだ堤家に嫁いでおらず、話を伝え聞いてはいましたが、十分なご案内ができずに申し訳ありませんでした」そして手紙は「皆様に御参り頂き、祀っております英霊も、又、その兵士達を、毎朝夕に供養しております。また義母も喜んでいと思います。本当にありがとうございます」と結ばれていた。65年の時を超えて、また一つ新たな『落下傘の絆』が結ばれた。



ハツさんが毎日手を合わせた普賢菩薩像



様々な色の石で組まれた美しいモザイク模様の浴室内

じめ空挺団の皆様、そして準備から撤収まで、入念な作業・案内をしてくださいました健軍駐屯地、北熊本駐屯地の隊員の皆様。慰霊碑の前に敷かれた真っ白い玉砂利を、若い隊員さん達が心を込めて手洗いしてくださったというお話を伺って、私は大変感激いたしました。英霊も、素晴らしい後輩の皆様のお氣遣いを、さぞ喜ばれたことでしょう。慰霊祭当日は土砂降りの雨の中、ずぶ濡れになりながら、お心の籠ったお世話を下さった隊員の皆様に、心からの敬意と感謝を捧げます。

（平成22年初夏・記）

世田谷の学童疎開と特攻隊

理事 廣嶋 文武

第5回「戦争経験を聴く会・語る会」
—今聞いておこう、薄れゆく戦争の記憶を残すために—

主催 北沢川文化遺産保存の会
とき 平成24年5月26日
場所 北沢タウンホール3階

皆さんの中には既に「知覧特攻平和会館」を見学された方が多いと思いますが、今回はそれらに纏わる物語の報告です。

同会館に「子供達と隊員」という写真が展示されていますが、筆者が初めて同会館を訪れた時には、入口近くの一番目に付きやすい場所に展示してありました。2回目に訪れた時には、奥の方のコーナーに移されていました。3回目に訪れた時も同じ場所にありました。

数年前、石原慎太郎氏が製作総指揮を務め、脚本を執筆した映画「俺は、君のためにこそ死ににいく」のエンディングの1カットにも、この写真は写し出されていました。

この写真にある子供達とは、世田谷区立代澤国民学校3年生の児童達で、

特攻隊員とは、誠第32飛行隊・武克隊と誠第31飛行隊・武揚隊の隊員勇士達でありました。

同会館の初代事務局長を務めた板津忠正氏も「稀有なこと」と述懐されていたと聞き及んでいます。

今から68年前の昭和19年8月、代澤国民学校3〜6年生455名が、長野県本郷村浅間温泉（千代の湯、井筒の湯、湯本屋、玉の湯、桐の湯、鳶の湯）に分宿し、同じく世田谷区立東大原国民学校（主に富貴の湯）、駒繫国民学校（主に目の湯）も近くに疎開したのでした。

前記の会に当日参加された、当時の代澤国民学校4年生の松本さん、鳴瀬さん、田中さんは、交々当時のことを想起されて、引率の柳井教頭先生が、児童達を「鉛筆部隊」と名付けたこと、午前6時、それも鳴瀬さんの起床ラッパが温泉一帯に鳴り響き、一日が始まる。鳴瀬さんは今もハーモニカの名演奏家として活躍中。

午前 勉強、座学、男女別、黒板なし、国語、算数、音楽、裁縫等。
午後 2時半頃授業は終わり、兵隊さん達と、それから交流。

食事 朝晩ご飯と味噌汁、昼すいとん、さつまいも、時にカレーライスも
秋から冬の寒さも、温泉入浴で温か

く、ぐっすり就寝できた。

夕方兵隊さん達も宿舍の旅館に帰られ、温泉に一緒に入ったり、遊んだり、宿舍から歩いて松本飛行場整備に、モッコを担いだりしたが、4年生にはなかった。

時には町に出て、葉屋でワカマツ錠を買い、それを一緒に飲んで空腹をしのいだ。

兵隊さんも松本出発前に休暇があったりして、時枝軍曹が昭和20年3月8日、世田谷の留守宅を訪問して下さって、元気な子供達の様子を詳しく話し

て下さったこと。

ショッキングなこともあった。ある夜寮母さん達が騒ぎをしていた。聞くと、1本の指があったこと。

兵隊さん達が「特攻隊」とは知らなかったこと、等々・・・

当日参加予定の東大原国民学校や駒繫国民学校の方々を取材された主催者主筆の木村健さんが、松本市にも足を運ばれて、話題はなお続く。

目の湯には、今も子供達の背比べの跡が刻まれた柱がある。

隊員達の辞世の歌の遺墨が発見されたこと。



子供達と特攻隊員



戦争経験を聴く会・語る会

満洲皇帝溥儀陛下の恩賜の煙草を包んだ絹の黄色のハンカチも発見され、松本市側もこの機会に、貴重な遺品を収集し、展示する準備を進めている、等々の新しい話題も披露された。

続いて7、8名の参加者から追加の質問が続き、静寂な雰囲気の中にも真剣な緊迫した会合も、「時間でですよ」と管理者に促される有様であった。

学童達にも兵隊さんとお別れの日が近付いたようです。

昭和20年3月18日と19日だったそうです。童謡を歌い、軍歌も皆で精一杯歌い、折り紙などもプレゼントしました。翌3月20日午前8時、軍刀を下げた立派な兵隊さん、お兄さん達の姿に万歳でお別れをしました。昼前に、低空飛行で翼を振り、純白のマフラーをなびかせて、「後を頼むよ」と南の空に飛び立たれたのでした。

『特別攻撃隊全史』によれば、第8飛行師団指揮下の特攻勇士達は、松本を発って沖縄中飛行場に進出し、昭和20年3月27日、中飛行場を発進し、慶良間北東洋上の敵艦船に突入して散華された誠第32飛行隊・武克隊（九九式襲撃機）の廣森達郎中尉、清宗孝己少尉、林一満少尉、今西修軍曹、今野勝郎軍曹、島田貫三軍曹、出戸栄吉軍曹、伊福孝伍長、大平定雄軍曹の9名を始

め、4月3日には、小林勇少尉、結城尚弼少尉、時枝宏軍曹、古屋五郎伍長、佐藤正伍長、佐藤英実伍長の6名が、沖縄西方洋上で敵艦船に突入、散華されました。

また、誠第31飛行隊・武揚隊（九九式襲撃機）は松本の飛行場を発って台湾の特攻基地に進出し、5月13日に、山本薫中尉、五十嵐栄少尉、柄沢甲子夫伍長の3名が、沖縄周辺洋上で敵艦船に突入、散華されたのを始め、5月17日には、高畑保雄少尉、五来末義軍曹の2名が、同じく沖縄周辺洋上で、また、7月19日には、藤井清美少尉が沖縄西方洋上で、敵艦船に突入、散華されており、合計21名の特攻勇士の方々が、沖縄特攻攻撃で赫々たる戦果を挙げて散華されております。

語り部としての松本さんは、毎年母校の代沢小学校児童に、ゲストティーチャーとして、戦争や特攻隊勇士達との約半年の忘れ難い交流、苦しくとも楽しかった日々を語り続けているそうです。

特攻勇士の御霊安かれと祈るばかりです。（北沢川文化遺産保存会相談役）

平成24年度義烈空挺隊慰霊祭に参列して

評議員 倉形 桃代

2年前、義烈空挺隊が出撃した健軍の地（熊本県）で行われた慰霊祭に有志として参列した。当日は、滝のような土砂降りの大雨が降った。そして今年、玉砕の地である沖縄で行われた全日本空挺同志会沖縄県支部（支部長・桃原浩太郎氏）主催の義烈空挺隊慰霊祭に、当顕彰会の代表として参列させて頂けたことは、真に感慨深いことであつた。

慰霊祭は5月26日、沖縄本島最南端にある摩文仁の丘・平和祈念公園内にある「義烈」碑前で行われた。滞在中は、梅雨真っ只中であつたにもかかわらず、雨は時折パラつく程度で、陽射しは強くても余り蒸すことのない爽やかな日々であつた。早朝、参列者の方々は、マイクロバスで読谷の玉砕の地に向かったが、一人出遅れた私は宿舎から直接摩文仁の丘へ移動した。

会場に到着すると、碑前では英霊の後輩の方々が慰霊祭の準備に動んでおられた。祭壇には御供物が並べられ、ドッシリと大地を抱くように建つ「義烈」の碑を守る衛兵のように供花が整

然と並んでいる。開始時間まで大分余裕があつたので、今回どうしても再訪したかった鹿児島県の慰霊塔・丘の一番高い位置にある「黎明之塔」、その下の断崖にある第32軍司令部壕にお参りに行つた。前日、陸上自衛隊那覇駐屯地内にある資料館で、第32軍司令官・牛島満中将（鹿児島出身）の奥様が寄贈された軍服を「表敬訪問」するところが叶つた。終焉の地である摩文仁の慰霊塔と壕にも手を合わせご報告ができて、とても嬉しかつた。

慰霊祭に先立ち、敷地内の展示ケースの除幕式が行われた。昨年5月の台風で倒壊したため、潮風に強い建材で再建したとのこと。ケースは、衣笠同志会会長、山本顧問、山之上第一空挺団長、桃原沖縄支部長の手によって除幕された。ケース内には、義烈空挺隊員が、出撃を前に健軍飛行場で故郷に向かって別れを告げる場面と、北飛行場（読谷）での戦闘場面を描いた油絵が2枚展示されている。保守管理は大変だと拝察するが、この地を訪れる多くの人々に、勇敢に戦つて散華された英霊のお姿を伝える語り部の役割を担ってくれることだろう。

慰霊祭は午前11時より、沖宮（おきのぐう）の神職によって斎行された。第15旅団音楽隊のトランペット吹奏に

合わせて「国歌斉唱」。その後全員で奥山道郎大尉以下百十三柱の御霊に黙祷を捧げた。祝詞奏上の後、祭主祭文奏上（桃原支部長）、衣笠会長と山上団長が、在天の御霊に慰霊顕彰のお氣持ちと、崇高なる精神を継承していく決意を籠めた追悼の辞を述べられた。全員で愛唱歌「空の神兵」を斉唱。玉串奉奠では「海ゆかば」が吹奏される中、各代表に続き参列者全員がそれぞれの想いを籠めて青々とした玉串を碑前に捧げた。慰霊祭後、その場でお供えのお下がりのスイカが切り分けられ振舞われた。

慰霊祭の参列者は、義烈空挺隊員の直系の後輩である空挺隊員やゆかりの方々ばかりで、OB・現役の方々を合わせて約30名であつた。皆様と一緒に参りさせて頂けたことを光栄に思っている。手作り感と先輩方への敬意と真心の籠もった感動的な慰霊祭であつた。

特筆すべきは、義烈空挺隊でただ一人の沖縄県出身者で、戦死された山城金栄准尉の長女・盛山榮子様が初めて参列されたことである。盛山様に「お父様の記憶はありますか？」と伺つたところ、「まだ2歳だったので、覚えていません」と仰つていた。一緒に参列された制服姿の頼もしい空挺隊員の

方々を、どんなお気持ちでご覧になつただろう。

生前の義烈空挺隊員と接した体験をお持ちの、沖縄翼友会玉那覇会長・濱松事務局長も参列された。夜の懇親会では、参加者全員でお二方のお話を聴いた。会場は、水を打つたような静寂と感動に包まれた。書物や映像でしか当時を知ることができない私達にとつて、お二人から日常で接した義烈空挺隊員との思い出話を直に伺えたのは、とても貴重な体験であつた。特に、同じ沖縄出身と知つた山城准尉や比嘉伍長が、大いに歓待して食事を振舞つてくれたという濱松様の体験談が強く印象に残つた。脳裏に浮かんだ映像の中で、その時の息遣いや笑顔、温もりまで感じたような温かな気持ちになつた。

翌日、私は夜の飛行機で帰ることにしていたので、遅ればせながら「義烈空挺隊玉砕之地」の慰霊碑が建つ読谷村に参拝に行つた。その地を訪れるのは3回目であつた。最初に行つた時、碑はさとうきび畑の一角に建つていて。戦友の方々が、詳細な調査をされて選ばれた、正に「玉砕の地」に建てられていた。長年の風雨に耐え傷付いた墓標は、草生す大地に独りじつと立ち尽くす魂の化身のようであつた。碑は



摩文仁の丘の「義烈」碑



再建された展示ケースの除幕式



掩体壕脇に移設された「義烈空挺隊玉砕之地」碑

玉砕現場附近(読谷村)に
建つ慰霊碑(平成22年2月撮影)

昨年、大分離れた畑の中の航空機掩体壕脇に移設された。元の場所は、読谷中学校のグラウンドになっている。高いフェンスで囲まれたグラウンドでは、生徒達が野球の練習をしていた。私は元の場所になるべく近い野の花が咲いた草叢を選んで、持参した靖國神社のお神酒・金平糖・お香を供え、祈りを捧げた。案内してくれたタクシートの運転手さんが、「校庭になってしまったけれど、日本の未来を担っていく子供達が、元気で野球ができる、そんな時代になったんだなあと、亡くなった方々も喜んで見守ってくれているのではないかな？」と仰った言葉を、私は複雑な心境で聞いていた。

その後、移設された慰霊碑にお参りしようと1年前の記憶を頼りに行ってみたが・・・その場所がなかなか見付からない。運転手さんが見当を付けた場所にも行ってみたが、どうも違っていたようだ。「あと一周して見付からなかったら諦めよう」と話していた時、道端を歩く「おばあ」に会った。運転手さんが沖繩弁で道を尋ねたところ、おばあは「すぐその道を入った所にあるよ。昔、飛行機が入ってたよ」と、当時の様子まで話して下さった。私達は「おばあは、英霊のお使いだったのかな」と感激しながらも先を急いだ。畑の道を入っていくと、見覚えのある航空機掩体壕が見えた。昨年は晴天だったが、今回は曇天の下でのお参りになった。お供えを捧げ手を合わせていると、パラパラと涙雨が落ちてきた。時代の流れ、諸事情の中、関係者の方々

が尽力されて、場所は移動しても碑という形を残せて良かったと思うが、私は玉砕現場に背中を向けた姿勢で手を合わせていることを、少し淋しく感じた。碑を探し回ったことで、思いがけず当時飛行場だった一帯を大きく周る結果となった。飛行場跡を見渡しながら、その時の状況を想像してみた。九七式重爆で胴体着陸した義烈空挺隊の勇猛果敢な攻撃により、飛行場の機能を3日間停止させ、敵の航空機・燃料に甚大な被害を与えたことは、大きな戦果であったと思う。

私達は、大空に開花する落下傘降下を見る時、その美しさに見惚れることに終始しがちだが、空挺隊員の任務は、降りてからが「本番」であることを忘れてはならない。敵の真つ只中に降下して戦う任務は、正に特攻である。降下訓練も、毎回命懸けである。「挺身赴難」の精神は、今も空挺隊員の心身に受け継がれ、訓練・実任務での困難な状況にも屈しない精神力と精鋭部隊であることへの誇りの根幹となっている。とりわけ、東日本大震災で甚大な被害を出した福島第一原発の現場で、被爆というリスクを負いながらも、果敢に任務を遂行された隊員の皆様のお姿は、世界中の人達、私自身も、報道等でよく存じている。私が出会った空挺隊員の皆様は強く頼もしいが、とても心優しく、澄んだ眼差しをしている。「真の力には美しさがある」という言葉があるが、私も空挺隊員の方々に対してそんな印象と憧れを持っている。陰ながら、いつも心からの声援を送っている。

今回の執筆のために、沢山の資料や写真を提供して下さいました「昭和・平成の空の神兵」の皆様、心から感謝いたします。山之上団長始め第一空挺団の皆様、空挺同志会の皆様、大変お世話になりました。有難うございました！

大東亜戦争に関する秘話

「言い残しておきたいこと」

参議院議員 迫水 久常先生

「編注・本稿は、昭和51年8月に開催された同台経済懇話会主催の講演会における講演の要旨を取り纏められたものであるが、ご了承を得て転載させていただきます。」

◇ ◇ ◇

8月になると、必ず大東亜戦争の何らかの話がマスコミで取り扱われるが、必ずしも、日本というものを正しく紹介しているとは思われない。局部の現象にとらわれすぎていることは、私は当時、第一線防衛の師団参謀として勤務し、また戦後、追放令をかいくぐり、サンケイ新聞政治部記者として、

◇ ◇ ◇

マスコミの実情に飛び込んでの感じであった。幸い、開戦、戦争指導・戦争終結の中核にいられ、今日、唯一人の生存者である迫水久常先生のお話「言い残しておきたいこと」と題して、同台経済懇話会（陸軍士官学校出身・在校の経済人の会）で特別講演をされ、「日本の塩」となれという言葉を言われたことと共に、私は私なりに「民族への誇りと遺言」とも感じ、先生・同台・師団にお願いして、私の責任にお

いて掲載しました。（文責・桜花＝松本重夫）

◇ ◇ ◇

ご紹介いただきました迫水久常でございます。先日、瀬島龍三さんからこの同台経済懇話会の話をお聞きまして、8月の月であるから終戦の責任者であり、一人の生き残りであるあなたが来て、当時の思い出話をせよと言われました。

◇ ◇ ◇

当時の陸軍の軍人さんといえば、私にとつては非常に思い出があります。本当に尊敬した一つの存在であり、同時にこんな扱い難い存在はなかったということも極めて事実でありまして、そういうような話を、今日は、30年経った今日ですから忌憚なくお話をさせていただきます。どうかと思います。

◇ ◇ ◇

それでは戦争の開始時と終結をする時の話をします。昭和16年12月、開戦の時はさすがに私達は緊張しました。私は当時、大蔵省の金融課長という金融統制の方の役目にあつたのです。その前、何べんか参謀本部にも呼ばれまして、いろいろ話を聞かれました。一体日本に戦争を始めて、戦争をする経済力はいつまでもつかというような質問も受けました。その時、私はこう答えたのです。「恩威並び行われるということが戦争の要諦であると思

う」敵地を占領したらその住民に非常に恩恵を施して、いろんな物資を供給したりして、恩威並び行われるのが理想だろうけれども、今、日本から品物を持ち出して占領地の人達にやるようなことをしたら、日本の経済力は到底持たない。むしろ占領地から、どれだけ日本に物を運んでくることができるかということが重点である。十分に

◇ ◇ ◇

占領地から物を運んでくるならば、日本の経済力はある程度持つであろう。長いことは持たない。私は当時、実は3年ということを言ったそうでありまして。そういうような話をしたこともあります。

◇ ◇ ◇

いよいよ戦争になって、非常に興奮しました。時の大蔵大臣は賀屋興宣で、先だつてまで衆議院議員だった方でして、戦犯になって、無期懲役を受けられた方ですけども、それが大蔵大臣、私を呼んで「どうも株式の相場が心配である。明日は開戦、ニュースが出るだろう。そういう時に、もし株が下がったら、要するに国民が、戦争に対して拒絶反応を示すことになるので、将来の士気のために、非常に具合が悪いから、君に一切任せるから、その株式は上げるように、値段が前日より高くつくように工作してこい」という使命を受けたのが、12月8日の午前2時頃

で、そろそろ始めている頃だと言われました。

◇ ◇ ◇

私は東京株式取引所に乗り込みまして、そして、「どうしても必要があつて、明日の朝の株式のイケ相場、寄り付き相場と言うのですけれども、最初の相場は昨日のヒケ相場よりも高く付ければならぬ事情がある。君達に任すから、政府の勘定でいくらでも株は買うから、一つ株を高く付けろ。ありとあらゆる株を高く付けるわけにいかないことは当たり前ですけども、当時、シンボリックな株としては、新株・東株新という株があつたのです。東京株式取引所の新株、これが象徴的な株でして、それを前日より高く付けろ」ということを言いました。

◇ ◇ ◇

相場は朝八時から付くのですが、その前に「帝国は英米両国と戦争状態に入れり」という簡単な発表があつて、それから間もなく相場が始まった。果たせるかな、相場はささなくて、とかく下げ気味なのです。それで私は買い注文を出した。当時、非常に大きな金ですが、東株新4万株というものを、とうとう政府の勘定で買ったのです。そうしてかろうじて前日のヒケ相場よりも40銭高く相場が付いた。まあ、夢のような話ですが、40銭、それでもとかく40銭高く付いたというので私は

安心しました。

そうして、賀屋先生に、相場を高く付けてきました、御苦労様でした、という話をしていううちに、真珠湾攻撃成功というニュースが入ったら、40銭どころではない、一足飛びに10円高、20円高となったのです。私はその時、しみじみ思いました。株屋の代表に「これは政府の勘定でやるんだから、貴方がたに決して迷惑をかけない。全部、資金は政府が提供するから」と言ったのです。

今でも忘れません。相沢弥八という株屋ですけれども、胸をたたいて「私共も長年、株で飯を食わせていただいております。国家危急の時に、もしお役に立つなら、私共が全部持ちます。私共は決して政府には御迷惑をおかけしません」と言うので、私は頼もしいやつだなあ、と思ったのです。ところが、そう言うてから、一時間もたたぬうちに10円、20円といっぺんに上げ始めたのですから、恐らくその時、彼等の儲けというものは大変な儲けになったのだと思っっているのです。まあ、不思議なものだといろいろ思いました。

そういうことで戦争が始まった。私は、私の家内の父である岡田啓介、二・二六事件の時の総理大臣ですが、それの所に行ってみました。そしたら、家

の中を、ただ意味もなく、ちょうど動物園の檻の中を歩いているように歩いているのです。「東条は馬鹿な奴だ。東条は馬鹿な奴だ」としきりに言っていました。「今、戦争を始めて、どうしていったい日本は勝てると思うのか、あれほど、いろいろな機会に言っておいたのに、とうとう戦争を始めて、東条は馬鹿な奴だ」と、こう言っていました。

そういうことで、実は戦争が始まったのです。私は二・二六事件のあと、大蔵省で統制経済の方におったわけですけれども、だんだん戦況が悪くなってきた、ミッドウエーの戦いが一つの日本の致命的な傷になったことは言うまでもありません。

昭和18年の夏の頃になるといって、重臣は、何とかして戦争を止める方策はないものかということを考え始めたのです。私は自分の家内のオヤジとして、岡田啓介のことを言うのはちょっと面はゆい気もしますけれども、率直に言っ、戦争終結に導いた最大の機関車、牽引力は岡田啓介だったと思っております。

岡田啓介が中心になって、総理大臣の前歴のある人たちを集めて、どうしても、この戦争は止めなければならぬ。早く止めなければいけない。それ

には、戦争を始めた東条内閣が存在したのでは、とても戦争を終結するという方向に動くわけはないから、この際、東条内閣を辞めてもらうように工作することは戦争終結の第一のステップではないかということを重ねて申し合わせたのは、18年9月であります。

それから、その工作が始まったのです。私は大蔵省の総務局長から内閣参事官、今の内閣官房副長官のような仕事をしておりましたが、その間、重臣会議の事務局長のようなことを秘かにやっておったようなもので、その間の事情を非常によく知っておりますけれども、これをいろいろお話しする時間は、今日はないと思います。

ある日、岡田啓介が私のところに来ました。その前に岡田啓介の長男は岡田貞外茂という海軍中佐で、軍令部・作戦部の方のアメリカ班の班長なのです。瀬島龍三さんは、参謀本部の作戦部の方におられました。私は大蔵省の役人でした。そして、政府の中心におったわけです。そういうことで、その3人は時々、岡田啓介の所で一緒に食事をするわけです。決して軍の機密を漏らしたりするということはありませんでしたけれども、話をしているうちに、言わず語らず、啓介はいろいろな事を胸にたたんだことと思えます。

岡田啓介はもう、ひたすら戦争は止めなければならない。その方向だけに歩いたのであります、そのような関係で昭和18年の10月頃、一つの問題が出てきました。岡田啓介は私を呼びまして、木戸内大臣の所に行つて「重臣たちはこういうふうに考えているのだ、と言つてこい、自分たちが行つたのでは非常に世間の目もあることだが、お前が木戸内大臣に会いに行つて言う分には誰も注意しないだろうし、岡田啓介との関係はみんな知つているのだから、岡田啓介以下重臣が皆、そういう考えであることを言つてこい」ということで、私は木戸内大臣を訪問して、岡田啓介は、こういうことを言いました、ということを行いました。

そうしたら、木戸内大臣は「岡田大将の気持ちはよく判るけれども、ともかく一生懸命総理大臣をやつてゐる東条に、もうお前は辞めよというわけにはいかないよ。やはり内閣の更迭などということは、世論が一つ起こつてこなければならぬのだよ。内大臣が、いきなり、東条、お前は辞めよとは、とも言うべき、言えることではない」と、こう言いました。

私は「閣下、世論とおっしゃるのは、どういう意味ですか、新聞の論調ですか、とても当時は言論統制で新聞の世

論で東条内閣反対などとは言えたわけではありません。国会における論議で、御承知のとおり、浜田国松とか、斎藤隆夫などの人が、若干の反戦演説をしたことよって除名をされるという状態がありましたから、国会で反東条内閣の世論が出てくるわけはありません。そうするというと世論というのは、そういうことであるとすれば、世論が反東条内閣的になるということは期待することは出来ないと思いますが、どうですか」と言いました。そして、木戸内大臣は非常に意味の深いことを言ったのです。「世論というのは、何もそういうことだけを言うのではないよ。重臣全体の、全体の重臣がそういうふうと考えていることがはっきりしてくると、それは一つの重要な世論の表現であると言ってもいいじゃないかと思う」という話がありました。

私は岡田啓介にそのとおり報告したのでありますが、それ以来、重臣の動きは非常に熾烈になってきました、内閣のあり方についての批判など露骨に表現するようになってきたのであります。一つ一つの行動を起こし始めた。昭和19年の初頭における国会の開会の状態を見ますと、今まで東条総理大臣に対して割れるような拍手があったのに、拍手の数が非常に少なくなってきた、という事実があるのです。そういうことで東条内閣も若干の動揺を感じまして、19年7月中頃に内閣の改造を企てました。

その当時の国務大臣というのは、今の国務大臣などとは比べものにならない値打ちがあるのです。天皇陛下の御親任による、内閣総理大臣と各省大臣、各務大臣は対等の立場でして、総理大臣は国務大臣を誡にすることは出来ないのです。このごろは総理大臣が任命するので、罷免が出来ます。当時はそうではない。天皇陛下の御親任ですから、総理大臣は辞表を出してくれないかと頼むことは出来ても、辞表を出すことは出来ませんと拒否されたら、内閣は辞めるか、その更迭をあきらめるか、どちらかをせねばならないのです。そういう状態で改造を企図し始めた。

岡田啓介は私にこう言いました。「どうも辞表の提出を勧告される可能性のあるのは、筆頭は岸信介だと思ふ」と。当時は国務大臣兼軍需次官、ずいぶん変なことをしたもので、大臣と事務当局官吏とが兼任になっているのですから、取締役・〇〇部長と同じようなもので、ちょっとおかしな制度でありますけれども、東条さんが軍需大臣、岸信介軍需次官・国務大臣の待遇ということでも、どうも岸信介だ。その次が内田信也だろう。その次は重光葵じゃないかと思う、お前は3人の所に行つて東条から辞表提出を求められても辞表を出さな、と言つてこい、と私に言うのです。私は相当緊張しましたけれども、岡田啓介は、私は非常に尊敬している人でありましたし、私は岸信介の所に行つてそう言いました。岸信介は「君の話はよく判つた。岡田大將に、閣下のお話は了解致しましたということを返事せよ」と。内田信也の所に行きました。内田信也は「この返事は君にしないで岡田大將に直接するよ」と言いました。重光葵さんは「うん」と言つただけで、とうとう返事をしませんでした。私は帰つて岡田啓介に報告しました。

その時、岸信介さんが「お前、どこから入つてきたのだ」(丁度今、市ヶ谷の双葉女学園の前に中華民国の学校があります。あそここの所が軍需大臣官邸でした)「玄関から来ました」「お前、帰りは裏口からそつと帰れ、車に乗つて来たのだから、その車は置いて、タクシーを拾うなりして帰れ」「どうしてですか」「今、玄関に憲兵の四方君が来ているから、どうも君は捕まるかも知れないから、裏から帰れ」と言われ、こそこそと裏から帰つたことを記憶しております。

そして、7月17日、夜中に岸信介の所に辞表の勧告が来ました。岸さんはこれを拒否しました。東条内閣としては、重臣を二、三人入れて、重臣との間の関係を良くして内閣を改造するということでしたけれども、それが不可能になりました。東条内閣は動揺しました。忘れもしません。7月17日、平沼騏一郎男爵の所に重臣全部が集まり、阿部信行という陸軍大將だけは召集をかけなかったようだけれども、他はかけました。私は役所の自動車を持っているものですから、お前は米内大將の所に行つて米内大將を連れてこいと言われ、米内大將や、東京裁判で絞首刑にられました広田弘毅さんを私の自動車で平沼男爵邸に連れてきたのでございます。

そこで重臣が集まつて「東条内閣の改造を以てしては、この時局は乗り切れない。強力な清新な内閣が必要である」という決議をして、それを内大臣を経て、閣下に奏上することになつ

たのであります。

そのことを聞きまして、東条内閣は辞職されました。その次の内閣、当時、重臣が後継内閣を奏上する、推薦をする方式でありまして、岡田啓介以下、重臣は鈴木貫太郎大将を総理大臣に後任すべく、非常に強く推薦したのですが、木戸内大臣は「現役の陸軍大将の後に、いきなり予備・退役の海軍大将が出てくるのでは、陸軍は動揺して大変だろうから、予備の陸軍大将がいいのではないか」という考え方を持たれまして、小磯国昭という当時朝鮮総督だった陸軍大将が総理大臣になりました。しかし、その時は小磯国昭大将一人に大命を降下しないで、小磯国昭大将と米内光政海軍大将の二人を天皇陛下はお呼びになりまして、二人に組閣の大命を下し、総理大臣は小磯がやれ、米内は海軍大臣をやれ、二人で内閣を作れ、いわゆる連立内閣という格好を取ったのであります。

それで、重臣たちは非常に不満を持っていたことは、私は知っておりませんが、しばらくそのままにしているうちに昭和20年4月、小磯大将は卒然として辞表を出された。私はその辞表を出されたいきさつについては、どういう理由だったかということが、はっきりのみ定めません。そこで、待望の鈴木

木貫太郎大将の内閣が誕生することになったのであります。

鈴木大将は、当時大蔵省の銀行保険局長をしておりました私をお呼びになつて、書記官長をやれとおっしゃる。私は当時42歳でした。そんな若い書記官長というのは、過去の歴史において一人しかいないのです。初代の総理大臣の伊藤博文公の内閣書記官房長官は伊東已代治という伯爵でありまして39歳、それ以後そういう例はない。私は到底その任に非ずと、もちろん、お断りしたのですが、岡田啓介が是非お前が受けてやれ、私は実は、岡田にこう言いました「このまま大蔵省にいれば、次の大蔵次官は私以外のところにはありません。私は必ず大蔵次官になります。大蔵次官になれば、日本銀行総裁ぐらゐは出来そうだから、その方が得ではないか」と言ったら非常に叱られ、「国家の存亡の岐路にたつたときに、私情のことをどうして考えるのか、お前の妻子は俺が育ててやる。お前は死ぬ気で書記官長になつてやれ」と言われ、私は興奮しまして書記官長をお受けしました。

非常な妨害がありました。それで書記官長に就任したので。書記官長に就任して、鈴木総理は私に「戦争は止めるつもりだ」とおっしゃるかと思っ

たら、決しておっしゃらない。私は一つの謀略と言えば大げさですが、何か組閣の告示案というものを作つて総理大臣のところに行きました。それには「戦争は遂行する。自分は民族の先頭に立つてゆく。国民は我が屍を越えて征け」という表現をしました。これは少し強過ぎますか、と気を引いてみますと「いや、結構です」とおっしゃる。それで、内閣成立の時の告示は「屍を越えて征け」という表現が出ておりますが陸軍は大変評判がよかったです。これは退役の海軍大将ではない。なかなか、しっかりした総理大臣だと陸軍の人は非常にほめてくれたことを憶えておりますが、そういうことで、鈴木内閣は始まったのですが、それから鈴木総理大臣は研究を命じられて「一体、日本に戦争遂行能力はあるのか」と。これは参謀本部も陸軍省も真剣になつて協力しました。そして出て来た結論は、昭和20年9月まで日本

の産業もどうやら組織的に運営出来るが、9月を過ぎてしまうと、交通・通信が分断されて、日本は一つの形として運営は出来なくなる。生産も組織的運営が出来なくなる。行政も組織的な全国一本の行政は出来なくなる。そういうことで、九州を一つの総監府に、独立国として運用が考えられ

るような行政組織を整えました。中国は中国、広島に原爆が落ちた時に、大塚惟精さんという中国の総監は死なれたのですけれども、近畿は近畿、中部は中部、関東は関東、東北は東北、北海道は北海道にそれぞれの総監府を置いて独立国としての行政能力を発揮できる組織を作りました。

生産も当然分割される。原材料が全然入ってこなくなり、総ての原材料は敵の潜水艦によつて途中で沈められているのですし、そして地上にある工場はほとんど爆撃されるのですから、生産は減少一方です。政策では物資動員計画というのがありまして、物資をどれぐらい作るという計画はある。鉄は年間300万トン、今から見たら本当にちやちやなものです。300万トンの年間生産見込みで、それを死守しようというのが当時の方針であつたのに、一カ月10万トン近くしか出来ないことが明らかになりました。

当時、陸軍、海軍の方も、あまり私は感心したことはないと思つたが、報告では飛行機は千機出来る。発動機を付けて飛ばしてみたら、その発動機を下ろしてきて、次の飛行機に付けてまた飛ばし、前の飛行機は首のない飛行機でありながら、飛んだ飛行機は千機ある。千機竣工したとい

う、そういう状態であることが明らかになってきました。

そこで、9月までには、どうしても戦争を終結しなければならぬなあということが明らかになったのが、4月の末であります。4月の初めに組閣してから約一カ月、そこで鈴木総理は戦争終結の方向を考えられた。

ところが陸軍は、私はこれはもつともだと思つたのですが「軍人は勝利か、如からずんば死である」これは本当に私はそのとおりだと思います。そのような教育を受けているのですから。

私はそういうことで「勝利か、如からずんば死」に敬意を表しました。しかし、現実の問題としては、戦争は終結せねばならない。

当時、陸軍は非常にソ連を恐れておりました。ソ連に対して、とうとう手出しをしなかつたということについては、評論家の中には高く評価する人があります。もし、ドイツのヒットラーの誘いに応じて、日本の陸軍がソ連に手出しをして満洲で戦争を始めておつたら、終戦の後の段階において、必ず日本は、北海道・東北はソ連のものとなつていたであらう。北海道・東北がソ連のものにならなかつたのは、陸軍がソ連に対して動かなかつたためであり、陸軍は非常に良い判断をしたとい

う評論をした人もおります。

私はその評論が正しいか、正しくなかつたかという評論をする気持ちはありませんけれども、ともかく非常にソ連を恐れていた。ソ連が何時なんどき入ってくるか判らない。これをどうしても防がねばならないということが、当時陸軍省の軍務課及び軍事課を支配していた考え方だつたと思うのです。

それで、しきりにソ連に仲裁を頼む案はどうかということが陸軍から提唱されました。鈴木総理大臣は、そういう事に対しては、あまり関心を示さなかつた。東郷外務大臣の如きは「あんな当てにならない国に仲裁を頼むなどの愚かな事をするものではない」と、そういう話を強く閣議で言われました。

現に、箱根の富士屋ホテルでありましたが、あそこに、ソ連の大使のマリツクが疎開しておりましたが、そこに広田弘毅元総理大臣・外務大臣と一緒に泊まられて、ソ連の意向を打診された事があるのです。この中に憲兵さんもいられるか知れませんが、その当時、憲兵さんの中には非常にわからない人がおりまして、広田さんの所に行つて、貴方はマリツクと時々会うが何を話しているのか、と調べに行つたのがある。広田さんだけを調べるのはよいが、マ

リツクに会見を求めて、どういう話をしているのか、広田さんは反戦主義者として検挙するという勢いになつた時代がありました。

6月22日、沖繩が完全に陥落しました。

その22日、天皇陛下は総理大臣、外務大臣、陸軍大臣、海軍大臣の四大臣、参謀総長、軍令部総長をお呼びになりまして、今後の戦争指導の方針について御下問がありました。それぞれの列席者から御返事をしたわけでありますが、その会合の最後に、天皇陛下は「これは命令で申すのではない。懇談で聞いてもらいたい、自分の願いを率直に言うならば、戦争を一日も早く止めるように努力してほしいと思つておる」と。そういうお言葉が陛下からあつたのです。

6月22日、各大臣、巨頭は恐縮して引き下がつてきました。阿南陸軍大臣は総理大臣に「この事は厳に外部に対しては秘してほしい。もし、こういう事が軽々しく外に漏れた場合には、陸軍の本当に熱心な真面目な人達は事を起こすに違いない。二・二六事件を上回る行動が起きて、クーデターが起こらないとは保証し難い。一つ極秘にしてほしい」と。本当に六、七人の巨頭は極秘にされました。そして、その時

に、木戸内大臣などから、一度、ソ連に接触してはどうかという意見がまた出てきました。そこで、ソ連に対して接触することになりました。仲裁を頼む、近衛公爵を特派大使として派遣しようとする工作を講じましたが、ソ連はこれを受け入れませんでした。

そうこうしているうちに、御承知のポツダム宣言が出たのであります。当時、米国は戦争を止める場合は、日本は統治権を米国に譲るということを前提として、無条件に降伏する以外、戦争は止めることはないと言つておつたのです。

ところがポツダム宣言が出ますと、東郷外務大臣は閣議において、このポツダム宣言の言うところは、今までの米国の言っていることとまるで異なつて、八つの条件を掲げて、その条件を日本国政府がのむならば戦争は終結してもよろしいという条件付終戦の提案と解すべき提案である。だからこれは受諾する方が良いとしきりに言われました。

しかし、陸軍大臣・阿南惟幾大将は頑として反対されるし、当時、最高戦争指導会議が設置されて、その幹事であつた陸軍省軍務局長等も、それに対して絶対反対の意向を示しておられた。しばらく様子を見ようと、ノーコメ

ントと、今だったらそう言うところでしよう。やはり英語の方が日本語より便利なところがあります。ところが当時、英語のノーコメントなどというところをちよつと知りませんでした。そこで、このポツダム宣言は「黙殺」すると言ったのです。ノーコメントと同じ意味だと私は思うのですが「黙殺する」とは英語でイグノーア（ignore）となる。それで本当に無視をする。リジェクト（reject）と同じことに扱われてしまった。それで米国は日本に対して一つの立場をとり、8月6日、広島に原子爆弾が落ちたのであります。

原子爆弾の落ちた状態をウイストン・チャーチルの手記を見ますと、非常に面白い。当時、連合国の首脳がカイロではないが、何処か他の所で会談しています。その時に米国の国防長官のステイムソンが、自分の所にやって来て、とウインストン・チャーチルが書いているのですが「赤ん坊は無事に生まれました」と言った。自分は一瞬、原子爆弾の実験に成功したのだな、とピンと来た。その時、自分の頭をかすめたことは、我々はソ連に対し、なぜあれほど宣戦布告をして日本に対する戦争に参加するよう頼んだのだろう、ということの後悔であったと書いてお

ルーズベルトはその代償として樺太より北、千島をソ連にやるというようなことを彼等は勝手に約束している。蔣介石に断わりもしないで、満洲国の権益はソ連にやるということをしてルーズベルトは約束しているのです。そういうことがあるのですから、ウイストン・チャーチルは、どうして原子爆弾

が出来たのに、あんなことを言ったのか、それなら、これだけでもって、英米の力で日本の戦意を喪失せしめることが出来て、ソ連が入ってくるという厄介なことが起こらないですむのに残念なことだと、ちゃんと書いています。そして、原子爆弾は8月6日に広島に落ちたことは御承知のとおりです。

原子爆弾が落ちました時には、さすがに軍はひるんだと私は思いました。それまで徹底的に強気であった。皆様方の大先輩の鈴木貞一中将が企画院総裁の時に、私は下に任せました。その鈴木中将が私のところにやって来られて「これは日本の軍人が負けたのではありません。日本の科学が負けたのだから、もう戦争は止めるほかに仕方がない」と言われました。

総理は歩き始めました。そして原子爆弾ということが仁科博士などによって確定してから、8月8日の夜、私をお呼びになって、翌9日、閣議を開いてその席上で終戦のことを自分の口から言い出すから、準備をするようにと言われまして、閣議の段取りを取りました。

9日の閣議は午前10時から始まったのですが、鈴木総理から事態はこういう状態である。戦争は終結しなければ日本国家は亡びる。皇室に対して類を及ぼし奉ることになると思うから、誠に残念なことであるが、ポツダム宣言を受諾することによって戦争を終結したいと思う、ということを経理から言われたのであります。

結果は全大臣が賛成したのであります。すが、阿南陸軍大臣は「絶対に反対である。どうしても承知は出来ない」とおっしゃいました。

私は阿南大将という人は非常に立派な人であると思いました。格好は実に良く、容貌も良く、もう本当に立派な大将で、あんな人はいないと今でも思います。莊重に「絶対に承知出来ない」と。米内海軍大臣、これまた立派な美男子であつて、態度が莊重なのですが、残念ながら東北弁、一度口を開かれると、全く幻滅を感じるような

物の言い方をされるものですから、阿南大将との対象は非常につきりして

しかし、そういうことで、その日の閣議は夜になってしまいました。そこで、夜の8時ごろ、鈴木総理大臣は、御聖断を拝そうと考え出されました。御聖断を拝するという先例はございません。明治憲法の精神は、天皇は神聖であつて、内閣は一切の責任を負う、天皇は神聖にして犯すべからず、天皇が御自分の判断で方向を決められることとはないというのが明治憲法の精神です。現に終戦の後で、当時の侍従長であつた藤田海軍大将が、天皇はなぜ東条の開戦はお許しになって、鈴木総理には終戦の御聖断をお下しになつたのですかと質問しております。

天皇陛下は極めて明確に「東条の時

9日の夜、宮中の防空壕の一室で御前会議が開かれたのであります。御前会議は11人の者が列席しました。総理大臣・鈴木貫太郎、外務大臣・東郷茂徳、陸軍大臣・阿南大将、海軍大臣・

米内大将、陸軍参謀総長・梅津元帥、海軍軍令部総長・豊田海軍大将、そして枢密院議長・平沼騏一郎男爵、これは本来は最高戦争指導会議のメンバーではなかったのですが、特に差し加えることにしたのです。

出掛けに米内さんが私にこう言いました。「平沼を加えたのは総理の御意向か」「あ、そうです」「総理は御前会議の席上で賛成派と反対派が対になるように考えたのかね」とおっしゃったのです。

実は、そういう深い考えはなく、ポツダム宣言を受諾するという方向で戦争を終結するというのが内閣の方針でしたし、ポツダム宣言というのは、条件付戦争の終結の提議であるから、それを受諾するということは一種の条約の締結である。条約の締結となると枢密院の批准を得なければなりません。しかし、この際、枢密院会議を開いている時間はないから、枢密院議長を連れてきて、それに代える心持ちで枢密院議長を加えたらどうだという鈴木総理のお考えだったのです。そういう知

恵は私たちの方が出したのですが、そういうことで枢密院議長は入ってきませんでした。

構成員のほか、陸軍省軍務局長・吉積中将、海軍省軍務局長・保科中将、内閣総合計画長官・池田純久陸軍中将、それに内閣書記官長・迫水久常であります。この池田純久さんという人は、私は影響を受けたんです。一つ、この際、余計な話をしますが、彼は聯隊長として支那事変に出て、何か武漢のあ

たりの武昌か漢口の戦闘の時のことのように、当時の戦争ですから白兵戦が行われていた。小高い丘に立って聯隊長は双眼鏡で見ていると、味方の陣営が一線に展開している。そのうち突撃ラッパが鳴ると小隊長は軍刀を振るって先頭に立って陣地を飛び出して行く。そうすると、その後を小隊長の皆がついて行く。よく見ると「そこで驚いたよ。小隊長は小隊長を中心にして、極めて鈍角に小隊長全体の兵隊がついて行く。ある小隊長は小隊長だけ突発して、先に出て非常に鋭角になっている小隊長がある。小隊長の掌握力が眼で見える。そういうことを俺は経験した。厳しいものだ」と池田さんが言われました。

私はこの言葉に非常に影響を受けて、爾後私はいろいろな長をやりましたが、部下は鋭角でついてきわしまいか、鈍角でついてきているだろうかとか、反省したことがあるのです。そこで会議が始まりまして、7人の構成員が全部意見を申しまして、結局、阿南陸軍大臣、梅津参謀総長、豊田海軍軍令部総長は戦争終結反対・本土決戦、そして東郷外務大臣、米内海軍大臣、平沼枢密院議長の終結賛成・ポツダム宣言受諾賛成。そこで、総理大臣が立ったのです。

私は鈴木総理大臣が自分の意見を言うと思いました。ところが総理大臣は自分の言う前に、陛下に「このような状態でございます。甚だ恐れ多いことでございますが、陛下の思召しを承らせていただきます」と申し上げました。反対・賛成対立の時に言ったのです。

天皇陛下は、椅子に腰掛けられたままでしたが、少しお体を前にお乗り出しになって「それならば、自分は意見を言う。皆の者は自分の意見に賛成してほしい」とまずおっしゃられた。

「自分の意見は、先ほど、東郷外務大臣の申したことに賛成である」とおっしゃいました。

その一瞬、私はもう本当に胸が押しつまるような気がして、眼から涙がほとばしりました。その隣には吉積中将が織られ、吉積中将もすぐに涙を書類

の上にポタポタと落とされていまして。一瞬すすり泣きの声が始まると、その次の瞬間、号泣、皆声を上げて泣いたのです。

私は会議の進行係ですから、陛下のお言葉がそれで終わりならば、会議を次の段に移さなければならぬと考え、すぐに陛下の方を拝しますと、天皇陛下は、斜め上の方をじっと見つめ、やがて白い手袋をおはめになった御手の親指を、眼鏡の裏にお入れになって、しきりに眼鏡の曇りをおぬぐいになっていらつしやいました。次に陛下は白い手袋をもって、しきりに両方の御頬をおぬぐいになったのであります。陛下はお泣きになっていらつしやるといふことを我々は拝しました。全く、身も世もあらぬ心持ちで、机にひれ伏して泣くより外はなかったのであります。が、間もなく陛下のお言葉は続きました。

極めて、たどたどしい、抑揚の乱れたお言葉です。全く陛下というお方は、ものをおつしやることは、お下手だと思えます。我々は口先だけで何票か稼ごうという感じですから、自然、ものを言うのがうまいような、上手になるのですが、陛下はものを言っている説得するなどはお考えになったことは

ないでしょうから、非常にお下手なのです。

ヴォキャブラリー、知っておられる言葉の範囲というものがやはり狭いようです。私も単独拝閲しました時に、陛下はしきりに警視庁の探偵、探偵とおっしゃる、要するに警察官ということとはあまり御存じなくて、探偵とおっしゃることを発見しました。ですから、たどたどしく、原稿なくしてものをおっしゃるなどのことはないのです。

それを原稿なしで、本当に、ものを考え、考え、おっしゃられ、陛下のお話は、割り合い長いお話でした。

「念のために理由を言っておく」とおっしゃったのであります。そして、「このまま戦争を続けてゆけば、日本国は亡びる。国民は大勢死ぬ。古い時代に、明治天皇が三国干渉の時に、お考えになったお気持ちをお自分はよく考えてみた。どうしてもここで敵の兵隊の上陸してくる前に、戦いを止める以外には、民族を救う所ではないと考え、戦争を止める決心をしたわけだ。自分はどうなってもかまわない、自分のことは心配してくれるに及ばない」という趣旨のことを、本当にときれときれにおっしゃったのであります。

陛下のお言葉は終わりました。鈴木

総理大臣から、陛下に丁寧な御挨拶をして、陛下の御退席をお願いしました。

天皇陛下は我々の最敬礼を受けて、そしてお席をお立ちになったのですが、私より、たつた一つしか上でない天皇陛下を、今の私の足もとのように疎ましく、後ろからお体を支えてあげようかと思うくらいお疲れの御様子であったのであります。本当に恐懼措く能わず、陛下がお帰りになりましたから、我々は会議を継続致しまして、ポツダム宣言を受諾、ということを連合国に電報を打つことを決めました。阿南陸軍大臣はそこで発言されたのです。「国体の護持ということは最大の要件である。国体の護持ということについては東郷外務大臣が、先方の8カ条の条件の中には、天皇制を廃止するということについては全く触れていないから、国体の護持ということとは、ポツダム宣言を受諾しても安全であると考えているとおっしゃるけれども、念には念を入れられる。どうしても、そういう点について一応、連合国の方の承認を取りたい」と。そこで向こうに対して電報を打ちました内容は「日本帝国はポツダム宣言を受諾。ただし、ポツダム宣言に掲げられたる条項の中には、天皇の国家統治の大権を変更する要求は、これを含まざるものと了解する。この了

解を確認せられたし」という但し書きを付けて打つことになったのです。

但し書きを付けて10日の朝、発信しました。当然、10日、11日のうちに返事が来るものと思いましたが、返事が来ません。返事は12日の朝来ました。返事はこう来たのです。「日本国の最終の政治の形体は、日本国民の自由によりて決定する」と。これを我々は見まして、天皇制を持つか、持たないかは、日本で決めることなので、ポツダム宣言にはそういうことを要求していないという事は、これで明らかであるという結論に達しました。

現に、その後に発表されましたトルーマンの手記を見ますと、「日本国は条件付きでポツダム宣言を受諾してきた。この先方の条件をのむべきか、どうかについて連合国は相談した結果、米国を除く三国とも、天皇制の廃止を要求した方がよい、という意向であった。しかし、米国は若し、天皇制の廃止を要求したら、日本国は戦争を止めないであろう。そうなるに更に、戦争で百万、二百万の生命を必要とする、という結論になって、日本の要求をのむことをやると各国に承諾せしめた。しかし、日本の条件をのむという

条件をのむことになって非常に具合が悪いから、他の表現を使いたいと思ひ、考えて、いろいろと判断した結果、名文を得た」というのが、先の言葉であります。

ところが、これは日本では困ってしまった。平沼枢密院議長という人は、御承知のとおり、観念的国体論者であります。彼は日本の国体は、国民の意志以前の問題であつて、それが国民の意志によって天皇制が存続するとか、廃止されるかというふうに認める、この回答は納得し難い。これは米国が日本の国体の本義を知らないものであるから、こういう回答をよこすので、どうしても、もう一度改めて連合国にこのことをよく説明して、納得のゆく答えを取ってほしい、と私に言われた。

陸軍の軍人さんは大勢、平沼男爵邸に集まりました。新聞記者がやってきて、どうも平沼男爵邸に陸軍省が移つたようですよ、と私に言いました。それで鈴木総理大臣は、いやしくも枢密院議長のおっしゃることですから、そう無理に押さえ付けられるわけにゆかない。もう一度、畏れ多いが御聖断を拝そうではないかといつて、14日の御前会議となつたのです。

13日の午後の閣議で私は非常に印象深いことが一つありました。阿南陸軍

大臣が「おい、迫水、ちょっと出てこい」と閣議中に私を呼び出されました。閣議室の隣にある電話を取って、多分、軍務局長か、軍事課長を呼ばれたのだと思います。「閣議においては逐次、君たちの意志が了解せられつつある。自分が帰るまで蠢動しては困る。じっとしておっしゃるに」とおっしゃって、「要すれば、ここに迫水書記官長がいるから、書記官長をして電話で説明させる」とおっしゃったのです。

しかし、阿南大将の意志は判りまじつじつまを合わせようと私は思いましたが、先方の方が、それには及ばぬとも言われたのでしよう、阿南大将は敢えて「電話に出る必要はない」と言われ、私はその電話に出ませんでした。これは、阿南大将が非常に含みがあった、安全に大東亜戦争を終結させるためにお考えになった一つの手段であつたと私は思います。

終戦後、若松陸軍次官と私とずいぶん論争しました。阿南大将があれだけ徹底抗戦をおっしゃったのは、若し、阿南大将が早く終戦賛成とおっしゃたら、きっと陸軍の若い方々は、おそらく陸軍大臣を殺すだろう。当時の陸軍省の制度では、陸軍大臣は陸軍の三長官の承認がなければ陸軍大臣にはな

れないという規定であつた。

陸軍大臣は、陸軍の大・中將に限り、しかも、三長官の承諾を得た者という制度を作ったのが広田弘毅さんの内閣、二・二六事件の次の内閣です。だから広田弘毅さんは、日本を軍閥政治にしたというところで、文官でただ一人、死刑になられた。

ですから、阿南陸軍大臣が殺されたら、鈴木内閣は陸軍大臣のいない内閣になり終戦をすることは出来なくなつてしまいます。阿南さんは天皇陛下の御意志が終戦にあるということをよく知っておつて、そのために、自分の生命を大切にして最後まで、陸軍大臣の地位におるといふことを御決心になつたから、徹底抗戦を言われたのだと私は思う。その証拠には、終戦決定の直後に自決されました。私は阿南大将の生命で、この終戦というものが無事にいったのだ、阿南さんの深謀遠慮、腹芸であつたと思います。

そういうことで、14日の御前会議において、天皇陛下は「先方の答えは、決して悪意で言ってきたのでは無いと思うから、これで満足してよろしい。自分はそう思う。速やかに戦争を終結してほしい」ということを重ねておおせられまして、大東亜戦争終結が本決まりとなつた。

14日の午後は、終戦の御詔勅の審議に入りしました。終戦の御詔勅というものは畏れ多いことであるが、私が下書きを書きました。8月9日の晩の陛下のお言葉を根拠として、原稿を書いたのです。「万世ノタメニ太平ヲ開カムト欲ス」という、非常にハイカラな漢文らしい言葉がありますが、あれは安岡正篤先生が入れてくださったもので、私の原稿は「永久に平和を確保せんことを期す」と書いたものであります。

先生は、これは日本語的漢文であるから、本当の漢文というものを教えてやろうと、宗の末期で、張横渠という人の文章に「政治の要諦」というのは、天地のために心をたて、生民のために命を立て、往聖のために、絶学を継ぎ、往政の古い政人のために学問を継承、文教を興す、万世のために太平を開く、これが政治の要諦と書いてある」、万世の為に太平を開くという言葉を使いなさい、というわけでハイカラな非常に貴重な文句が入りました。あれは安岡正篤先生のお陰なのです。

実は終戦の御詔勅に「時運ノ趣ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ビ難キヲ忍ビ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」、時運の趣くところと書いてあるのです。そこには私の原案には何も書いてなかつたのですが、義名の徴するところと書

けとおっしゃいました。義と名、つまり筋道がそうなっているから、ところが義名という言葉は判らないということが閣議で問題になった。そこで辞書を持って来いということで辞書を引きました。残念ながら、持って来た辞書には義名という熟語は出ていませんでした。辞書に出ていないものが判るかと言ったのが國務大臣・安井藤治陸軍中将だったことは間違いないと直せん。外の大臣が時運の趣くところと直せということになりました。安岡正篤先生は大変憤慨され、筋道がこうなんだからと書いておくもので、時運が趣くところとはなんだ。時がそうなつて、仕方ないからでは行き当たりばったりじゃないか、戦後の日本の政治が行き当たりばったりであるのは、君のあの詔勅を直したせいと、今もって大変叱られてる。

ここで、ただ一つ、申し上げておきたいことは、おしまいの方に「朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ」、この一句は、阿南陸軍大臣が特に、国体を護持し得たということ宣言せよとおっしゃるものから、そこに入れました。「朕ハ国体ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ」というように書きまして、その次に將來、難しい困難な前途がある、「子孫

承るべきは、

相伝へ確ク神州ノ不滅ヲ信ジ」と書いた。私は本当に日本は神州だと思いません。この土壇場になって、それでも戦争を終結することが出来た。ドイツはどうですか、東西に分かれてしまった。

幸いに御聖断によって、敵兵が一步も本土に上陸しない前に、戦争が終結したが、ドイツとは大違い、私はこのような平穩に終結したということは日本が神州だからと思うのです。

陸軍があれば強かったのに、なぜ退役の海軍大将内閣を承認したのか、それだけでも神州であったからと言わざるを得ない。どうしても阿南大将が戦争は終結しないと決心されておられたら、一片の辞表を出して来られたら、どうにもならなくなった。阿南大将が何度か内ポケットに手を入れられる

時、辞表じゃないかと、閣議で何度も心配したことを覚えております。阿南大将は最後まで付いて来られて、終戦の御詔勅に副書されて自決されておられるのです。

東西ドイツは戦争を始めたドイツとは無関係なのです。ですから、東西ドイツは旧連合国との間に条約はありません。

日本はちゃんとサンフランシスコの講和条約があるということ、神武天皇のお始めになった日本が今日まで貫いているということで、ドイツとは全く違う。これは天皇陛下の日本にいらしたことだと私は思いますが、この御稜威を助け奉ったのが、鈴木貫太郎であり、阿南惟幾陸軍大将であった。私は多摩墓地の阿南陸軍大将のお墓を

時々参拝しますが、本当にお墓に抱きついて、阿南大将にお礼を申し上げたい気持ちで一杯です。

この段階で、瀬島龍三さんのことを申し上げたい。私は度々お目にかかって、いろいろ意見を交換していたのでありますが、昭和20年4月中頃、すなわち鈴木貫太郎内閣が成立して間もなく、深夜おそらく午前1時を過ぎていたと思いますが、私は内閣書記官長官舎に私服の瀬島さんの訪問を受けました。

話は当然、戦局の推移の問題になり、私が鈴木総理の真意は、出来るだけ早く戦争を終結に導くことにある旨を打ち明けたと思います。これに対し、瀬島さんは「私が参謀本部において、いろいろ計算してみました、どう計算

しても今後戦局を好転せしめ得る見込みは残念ながらありません。内閣の方針は極めて妥当であると思えます」という、誠に率直な話であったのであります。

私はこの話の要旨を鈴木首相に伝えました。私としては陸軍の建前と本音を知ったような気がしました。この私の報告で鈴木首相の終戦の決意を一層固くするのに大きな効果のあったことは言うまでもないと思います。私は、瀬島龍三さんも終戦について一つの大きな役割を果たした人だと思えます。

皆様は「日本の塩」になってください。日本が腐らないように、お祈りする次第であります。

忘れ得ぬ人

回天特攻菊水隊 村上克巴少佐

会員 出雲 博

戦時中、僅か3年の軍隊生活でありましたが、海軍という比類のない最高の人間集団に勤務することができ、人間として生きるための最高の教育を受けたと自負し誇りに思っております。

さて、生涯を通じて私の心の中に生

き続けている村上克巴少尉(むらかみかつとも)(海軍機関学校53期生)との出会いは、今を去る69年前の昭和18年暮れ、戦艦「伊勢」に乗り組む中でありました。

私は、昭和17年9月、15歳で海軍に志願して入団した第1期特別年少兵であります。大竹海兵団で約1年間の教育訓練を受けた後、横須賀の海軍工機学校において、機関の術科教育を履修し、昭和18年12月1日、戦艦「伊勢」

に乗艦しました。その時の機械部・第

19分隊士が村上少尉でありました。

私は16歳、海軍上等兵で、当時は、兵が直接士官の方と会話を交わすことはできませんでしたが、「あること」から特別に目を掛けていただくことになりました。それは、暮れも押し迫った艦内で、拳艦戦闘訓練のあとの夕食後、無礼講の大酒宴が開かれた時のことでした。

私は16歳になったばかり、お酒は飲めず、専ら先輩たちのお酒の爛をした

り、ビールを冷やしたりしております。

た。宴半ば、ある先輩からお酒をすめられ、「勘弁して下さい」と断っておりますと、「俺の酒が飲めないか」と絡まれ、困惑しているのに気付かれた村上分隊士が「おい、その酒は俺が代わって飲んでやる」と助けて下さいました。そして、私を呼び寄せ「君はまだ若い、酒など覚えるな、いいか…」

また、「君達の時代はきつと来る。生き残るんだぞ、いいか、死に急くなよ」

とも言われました。そのお言葉は今もこの耳に、脳裏に強烈に残っておりま

す。私が余りにも若く、あるいはひ弱に見えたからかもしれません、翌日から課業止め後（4時）の別科時間になり

ますと、班長に電話がくるようになり、「防具を付けて上甲板に來い」と

言われました。

私の姿を見ると「よし、どこらでも突いてこい」と言われます。

私から見れば分隊士は巨体で屈強。遮二無二突きを入れますが、びくとも

されません。そのうち「いくぞ」と一突きされると身体が震えるほどの強烈

さでありました。まともに食らった時は、2米くらい素つ飛んで砲塔に打ち

当たり、一瞬激痛が走る程でしたが、兄のような親近感が込み上げ、心は弾

むのでありました。

それから暫くして、19年春頃には、村上分隊士の姿が見えなくなり、退艦

されました。ご一緒したのは僅か4ヵ月ばかりですが、瀬戸内海岩国沖の聯合艦隊柱島泊地における、忘れ難い、また、懐かしい、心に残る思い出であります。

となり、江田島で教育を受けたのであります。その時「教育参考館」の回天特別攻撃隊コーナーで、戦死者名簿の中から、村上さんのお名前を目にしました。頭に大きな鉄槌を受けた程の衝撃が走ると共に、胸が締め付けられる思いで、目頭は熱くなり、涙がこぼれてきました。そして、暫く動くことができませんでした。

記録によれば、昭和19年10月20日、回天菊水隊の一員（海軍中尉）として伊

37潜に搭乗、パラオ島コッソル水道において壮烈なる戦死を遂げて（戦死後

二階級特進・海軍少佐）おられました。

私を戦艦「伊勢」で鍛錬して下さった頃、「生き残れ」「君達の時代は必ず

来る」と言われた時、村上さんは20歳、既に「特攻」を決意しておられ、静かに退艦して行かれたものと思ふとき、

私の胸は張り裂けんばかりであります。この上は、ただひたすらご冥福をお祈り致しますのみであります。（後日談

となりませんが、15年後の戦艦伊勢の戦友会で、当時の分隊長から、村上さん

は血書して志願しておられたとお伺いし、新たな感涙に咽びました。）

この日から私の脳裏には、今までにも増して村上さんの在りし日の面影・

英姿が鮮明に蘇り、今日に及んでおります。艦隊勤務で舞鶴寄港時には、旧

海軍機関学校跡地に建立されております「戦没者慰霊碑」にお参りを欠かさず、また、平成5年春には、山口県・大津島の回天基地を訪ね、「慰霊碑」に参拝しました。そして、村上さんが伊37

潜に搭乗された岸壁に佇み、遥かなる南の海に思いを馳せたのであります。

その時から、御遺族を探してお墓参りをしたいと思うようになり、気に掛けておりましたところ、海軍機関学校

卒業者名簿から弟様が小倉市に在住と分かり、再定年を迎えた平成8年秋に

念願のお墓参りを果たすことができました。お寺は門司港そばの地藏寺であります。（注・2度目の参拝の折、奥

様から伺って感服したことであります

が、「このように立派な方が内の墓地に眠っておられることを知り、すぐに

大津島に行つてきました。資料館も見学し、感動と感涙に咽びました」と言

われ、私は大きな喜びとしました。そして、日本人の多くの人々に大東亜戦争の意義を正しく認識してもらいたいと思ひました。）

その帰路、郷里島根県の実家に立ち寄り墓参をした際、広島まで送るとい

う弟夫婦に、丁度よい機会と思ひ、早立ちで江田島を案内することにしまし

た。その時、奇蹟とも言うべきか、教育参考館の回天コーナーで村上さんの

遺書に接し、驚きと新たな感涙に咽んだのであります（遺書は後掲）。伊37潜は帰投せず、全員戦死、回天搭乗員の遺品も何一つないと言われていましたので、不思議でなりませんでした。過去に幹部候補生学校で、また、第一術科学校で学生の時、更には艦隊で江田島寄港時、何回となく見学して

いるのに目にしなかつたことであります。館長にお聞きしますと、「ここに

展示しているものは7%程度で、倉庫に保管し、時折入れ替えております」とのことでした。また、妹様とも連絡

が取れ、お聞きしましたが、遺書のこととは初耳で見たことがないとのことでありました。

なお、横須賀の第二術科学校に機関術参考資料室があり、機関学校53期生のアルバムがあり、学生の写真と一言

が記されております。村上さんは一文

字「生」と大書しておられます。多くの方が「勇往邁進、武勇」など戦時に

相応しい言葉であるのにと、その真意を理解することができず仕舞いでし

た。私は長年、村上さんのこの「生」という言葉の真意に触れたいと考え続けていたのでありますが、この遺書を

目にして初めて気が付きました。

村上さんの「生」とは「悠久の大義に生きる」という崇高にして深遠なる



村上家の墓

※村上家は戦国時代末期の頃に瀬戸内海を制覇した村上水軍の末裔とお聞きしました。

ものであり、かの楠公精神に通ずるものであることを知り、心を洗われる思いがいたしました。この遺書に出会わなければ、生涯その真意を知ることができなかつたであろうと、唯々恥じ入るばかりであります。それにしましても、この度弟夫妻を同伴して見学を思い立たなければ、この遺書に触れることもなかつたであろうと思ふとき、不思議なご縁と思われたいと思ふのであります。なお、遺書は横書きで、横1メートル超、縦60センチ位の大書です。

遺書

※村上さんは、生徒時代から「悠久の大義に生きることを信念として固めておられたのであろうか。この時、3学年、若干17歳である。」



53期生のアルバムより



参詣した筆者

神州護持の大義に生く
さらに言うべき
ことなし
ご指導賜りし
諸先生 先輩
同輩の方々
深く感謝を捧げます
最後に
御両親様
御祖母様
弟妹の
ご健康をお祈り申す

「日本は戦争には敗れたが、その代わりに何物にも替え難いものを得た。それは世界のどこの国も真似のできない特攻隊である。代償を求めない純粹な行為、そこにこそ、真の偉大さがある。訪日したときに、特に天皇陛下に申し上げておいた。
フランス人の中には「なぜ」若い命を犠牲にしてまでも、と疑問を抱く者がいる。私はいつも言っている『母や姉や妻が生命の危険にさらされた時、自分がやられると承知で暴漢に立ち向かうのが、息子の、弟の、夫の道である。愛する者が殺められるのを黙って見過ごされるであろうか』と、また、『彼らには権勢欲も名誉欲など一かけらもなかった。ただあるのは祖国を思う情熱があるだけだった』と。なお、続く。『私は祖国と家族を思う一念から、恐怖も、生への執着もすべてを乗り越えて、潔く敵艦船に体当たりした特攻隊員の精神と行為の中に、男の崇

(付記)

克巴

皆様には既にご存じのことと思いますが、私が心から感動した言葉をご紹介します。戦後、フランスの情報大臣、文化大臣を歴任し、また、駐日大使も務められたアンドレ・マルロー氏は、

高な美学を見るのである・・・と。私は、この文に接した時、身震いする程の感動を覚えました。日本人の中にも、「特攻」を誤認している者が少なくないのに、洋の東西を問わず、これが真の人間の「心」と感服いたしました。



菊水隊の回天各4基を搭載した伊36・37潜と共に大津島から出撃する伊47潜 (昭20.11.8)



村上克巴中尉 (海軍機関学校53期)

『特攻隊に捧ぐ』の坂口安吾

理事 廣嶋 文武

『政治とは何か!』岩田温著、総和社出版。産経新聞広告欄が目に残った。「GHQが抹殺した坂口安吾『特攻隊に捧ぐ』」の目次である。早速、区立図書館に尋ねると、未購入で、二人程先約があるとのこと。ようやく手に届いたのは、6月中旬であった。著者の岩田温氏は、弱冠28歳、政治哲学者で、大学専任講師とのこと。

特攻隊という文字を見れば、読んでみなければ、しかも、坂口安吾とくれば・・・と、繕いてみれば、昭和22年(1947年)2月号『ホープ』に掲載予定の文章が、GHQの検閲によって削除されたということである。

坂口安吾の文章は、「もとより死にたくないのは人間の本能で、(中略)若者の胸に殉国の情熱というものが自在し、死にたくない本能と格闘しつつ、至情に散った尊厳を敬い愛する心を忘れてはならないだろう。(中略)我々愚かな人間も、時にはかかる至高の姿に達し得るということ。それを必死に愛し、護ろうではないか。」というのである。著者は、それらのことに種々見解を述べている。

たまたま手元に届いた『郷友』の編集者も、そのメモとして、「作家坂口安吾が『愛国殉国の情熱』が決して間違ったものでないことに最大の自信を持って欲しい。特攻隊員が示した精神と行為こそ『ををしさ』であり、日本人の気質として誇りにしたい。」と結んでいる。

筆者は、文学、まして坂口安吾のこととは知らなかったのに、何故か不思議な縁が出来てしまった。坂口安吾は、大正14年(1925年)、当時の東京府荏原尋常高等小学校の分教場(今年創立132周年を迎えた現・世田谷区立代沢小学校)の教員をしていた。その



坂口安吾文学碑

間の事情は、小説『風と光と二十の私』に詳述されている。また、3年前の平成21年12月には、「あんど先生が帰って来た―81年振りの帰還―」坂口安吾文学碑除幕式にも参加した。

「北沢川文化遺産保存の会」が、同会主催の作家きたむらけん先生を中心に、代沢小学校児童PTA、新潟日報社、世田谷区教育委員会、同文学館、東洋大学同窓会、東邦薬品等の協力により、写真のようなモニュメントが完成し、緑道を散策する多くの人々に感銘を与えている。また、個人的に、生前、教え子であった地元のお二方にも話を伺ったが、そのお一人の伊東長治さんは、地元北沢一丁目の町会長として、長く区政に貢献された方である。もう一人は、斉藤定男さんで、下北沢駅前の不動産紅屋の社長として活躍され、私本『静』に詳しく、坂口先生と学んだ、むしろ遊んだことを記述しておられる。区立代沢小学校の玄関にあるガラスケースには、坂口安吾関係の品々が展示されている。

写真に見える門柱は、「蒲田の家」の門柱で、坂口安吾はここで、前記の『風と光と二十の私』の他『白痴』『墮落論』等を執筆した。戦後の苦しい生活の中で、日本の将来を思い、あの戦争で散った特攻隊員を想い、その崇高

なる尊厳に敬愛を捧げた、あんど先生に深い感銘を覚えるものである。「人間の尊厳は、自分を苦しめるところにある」(文学碑より)

Kartプロモーション・プロデュース・特攻の母鳥濱トメ生誕110年・没後20年記念演劇『帰って来た蜚～慟哭の詩～』
脚本・演出 柿崎ゆうじ

この演劇の東京公演は、平成24年6月8日から16日まで、三鷹の「前進座劇場」で上演された。また、新潟公演は、7月4日、長岡市立劇場で上演された。この演劇の主題となっている「帰って来た蜚」の特攻隊員宮川三郎軍曹(第104振武隊員、昭和20年6月6日、沖繩周辺洋上で特攻死、戦後陸軍少尉)が新潟県小千谷市の出身であり、旧制長岡工業学校(現県立長岡高等工業学校)の卒業生であることから、また、同校が今年創立110周年の節目の年を迎えたことから、同校同窓会ほか地元の支援を得て、長岡市での公演となったものである。
Kart Promotionのプロデュースによる演劇「帰って来た蜚」の上演を観賞するのは、平成22年7月15日から25日までの「草月ホール」公演に続く二



宮川三郎軍曹

度目である。前回は副題として「〜神々のたそがれ〜」とあり、今回の副題は「〜慟哭の詩〜」である。前回も主題の「帰って来た蜋」の宮川軍曹の秘話を中心に構成されていたが、「アリラ」の歌声」の光山文博少尉（第51振武隊、昭和20年5月11日、沖繩飛行場西海面で特攻死、戦死後陸軍大尉、朝鮮出身、京都薬学専門学校卒、特操1期）の秘話などが挿入されていたのに対し、今回は、「いまひとたびの逢ふこともがな」の川崎涉少尉（第51振武隊、昭和20年5月30日、試験飛行中墜落事故死、鹿児島出身、特操1期）の悲恋の秘話が挿入されていた。いずれも鳥濱トメさんの二女赤羽礼子さんと石井宏氏の共著『ホテル帰る―特攻隊員と母トメと娘礼子―』に収録されている、知覧特攻隊員達の感動の実話を原作とし、カートブローモーションの代表者柿崎裕治氏の脚本・演出、製作総指揮に

なるものである。なお、今回は長岡公演のため、宮川軍曹の出身地小千谷市在住のペンクラブ会員広井忠男氏の著書『ホテルになった特攻兵―宮川三郎物語』も原作の一つとされている。特攻隊員に関わる演劇や映画・映像は数多く製作されており、中でも石原慎太郎製作総指揮・脚本、新城卓監督により平成19年に製作、上映された「俺は、君のためにこそ 死ににいく」が最も大掛かりで、インパクトが強かったが、これも鳥濱トメさんの語った知覧特攻隊員の物語がその中心をなすものであった。特攻隊員から母のように慕われた鳥濱トメさん、そのトメさんが語った特攻隊員達の真実の声や姿。「思えば、もう遠い昔のことかも知れませんが、いつまでん忘れることができません。みんな素晴らしか、美しか若者たちでございました」「止めることもできません。慰めることもできません。ただただ、あんな人達の魂の平安を祈る

ことしかできませんでした」。鳥濱トメ役を好演した大女優岸惠子の劇中の台詞である。

この種の映画・演劇等を企画・製作するに当たっては、当時の時代背景や特攻隊の史実を考究し、特攻隊員達の真実に迫るものでなければならぬ、何よりも特攻隊員達の魂をいささかなりとも感得したものでなければならぬ、と筆者は常々考えている。

昭和3年生まれ筆者は、組織的な特攻攻撃が始まった頃は16歳、それも既に陸軍幼年学校で3年近い軍隊生活を経験しており、お国の危急存亡の時に当たり、1日も早くお役に立ちたいと念じつつ、日夜研鑽に努めていた。

当時、筆者のような現役将校を目指す軍人でなくとも、日本人ならば誰でも「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」身命を国に捧げるのは当然のことと観じていた。それが大和魂というものである。余談であるが、千余年前に著された『源氏物語』の中で、紫式部は、主人公の光源氏をして、その嫡男夕霧の教育方針を祖母の大宮（故葬の上の母）に説明させているくだりがあるが（第21帖「乙女」）、その中でも「大和魂」の必要性を説いている。即ち12歳で元服した夕霧を大学に入学させるについて、高貴な身分にある夕霧を、四位に

なれる特典を取って放棄して、六位という低い身分で入学させた理由を述べている。

その理由というのは「高き家の子として、（司・冠心）冠心にかなひ、世の中盛り
に驕りならひぬれば、学問などに身を
苦しむことは、いと遠くなむおぼゆ
べかめる（高い家柄の子に生まれ、官
職や位階が思いのままになり、はぶり
をきかせて何でも見下す癖がついてし
まうと、苦勞して学問を身につけよう
という気は、全然なくなつてしまいま
す）・・・」と。

更に「なほ才を本としてこそ、大和魂の世に用いらるる方も強う侍らめ。さしあたりは、心もとなきやうに侍れども、つひの世の重しとなるべき心おきてを習ひなば、侍らずなりなむ後も、うしろやすかるべきによりなむ（やはり、才（学問）を基礎にして、はじめて大和魂（実際能力）の効用が発揮されるのです。入学当初は、官位が低くて不満だらうが、最終的に、国家を支える重臣になるべき心構えを習得するならば、私が死んだ後も安心だというわけで入学させました）・・・」と。

要は、学問と大和魂とが相互に補完する人間でなければ、国家の重臣は務まらない、とするもので、和魂漢才、つまり日本精神の二重構造が明確に分



鳥濱トメさんと特攻隊員達

析されている。この源氏の教育観には、紫式部の父親像が反映していると言われるが、「大和魂」という言葉を使って、当時、我が国の精神思想の核に強く影響していた漢才（中国の学問・教養）に対し、日本固有の精神や日本人の在り方を強く意識し、生まれつきの感受性や日常生活の中で自然に育まれた精神能力は、日本固有の精神の発露とみなして「大和魂」と呼んだものと思われ、外敵に挑む果敢な闘争心のみならず、可憐な花を愛でる風流心まで、広く日本人の精神の営みを「大和魂」と呼んだのであろう。今の日本人こそ、紫式部が光源氏をして言わしめた、この「大和魂」という言葉を痛切に噛み締める必要があるのではないか。

ところで、この演劇を企画・製作したカートプロモーションが大事にしているのは、この「大和魂」ではないかと思う。「この作品を国と愛するものを守る為に散華した人々に捧げる。人は、時として戦わねばならぬ時がある。大事なものを守る為に戦い、そして、散っていった人々の崇高なる精神と行方を忘れてはならない。恒久の平和の為に。」と。また、「彼らは勇ましかった。彼らは純粹だった。そして、彼らはたまらなく優しかった。この作品は国と愛するもの

の為に散華した英霊に捧げる。特攻、それは人類がかつて経験した事のない壮絶な作戦であった。必死の出撃を、この国を護らんとして、広大無比な純粹な精神で飛び立って行った若者達を忘れてはならない。永遠に。」と、公演のパンフレットに籠めた願いである。この願い、そして使命感を忘れず今後とも活躍してもらいたい。

製作に当たってはいつも、顔合わせに先立ち、製作及び出演者一同で靖國神社に参拝し、靖國の英霊に対する感謝の祈りと製作へ向けた決意の報告をしているという。また、映像の撮影を兼ねて知覧特攻平和観音に参拝し、知覧に点在する特攻に関する史跡を巡って特攻隊員達の息吹を感じるように努

めているとのことである。当然のことながら、当時の特攻隊員達の魂に触れるよう努めなければ、本当の演技はできないのではないか。

「・・・この作品の初演で宮川三郎軍曹（後の少尉）を演じさせて頂いたのは、もう四年も前になりますが、未だにあの感覚は忘れることはありません。役者としても、人間としても、自分の大きな分岐点になった作品です。宮川三郎少尉の故郷を一人で訪れ、お墓の前で30分程身動きも出来ず、ただ何かを感じようとしていた事、稽古も半ばの頃は、宮川三郎少尉の写真を眺めながら、今から死に行く人が何故こんな顔が出来るのだろうと穴の開く程写真を眺めていた事、ここには書ききれない程、いろいろ考え、感じようとし、そこから戦争の真実を知りたいという想い、日本の、日本人の歴史を知らなければという想いが形作られて行きました。大東亜戦争の真実、特攻隊員達の真実、今の世の中では、それは教わる事が難しく、自分で求めていかざるを得ません。この作品を通して何か感じ取って頂ければ幸いです。そして戦争を知らない全ての人達へ、この時代を理解することは難しいと思いますが、ただこの真実の物語を忘れないで頂きたいと思えます。この作品

は一生公演し続けられる事を望みます。これからの日本の為に、純粹無垢な精神で散華していった彼らの為に」と。第1回公演で宮川三郎軍曹役を演じた俳優・出合正幸君の言葉である。

今回の東京公演を、筆者が観賞した6月11日は月曜日であり、しかも19時からという遅い時間帯であったにもかかわらず、およそ千名は収容できそうな前進座劇場は、ほぼ満席であった。大半が若者達で、熱気に溢れていた。

特攻隊の出撃や特攻攻撃の映像、特に沖繩戦での米軍撮影に係る特攻攻撃の迫力ある映像を交えるなどして、特攻攻撃の実態に迫ろうとした企画は良かったし、戦後の知覧特攻平和観音堂での鳥濱トメさんと元特攻隊員や遺族との再会の場面など、感動的な場面が多かった。観客の多くが感動の涙を流したものと思う。特攻の真実をいつまでも語り継いでいってもらいたい。そして、潔く散華した若い英霊達の慰霊顕彰を続けていってもらいたい。

（飯田 正能記）

新刊図書紹介



●或るアメリカ人二世の特攻

陸士61期 大澤 俊夫

門田隆将というノンフィクション作家がいる。彼は平成22年に『この命、義に捧ぐー台湾を救った陸軍中将根本博の奇跡ー』を刊行し、山本七平賞を受賞している。この作品を執筆するに当たっては、偕行社にも取材に来ている。その作家が、大東亜戦争開戦70周年に当たる平成23年に『蒼海に消ゆー祖国アメリカへ特攻した海軍少尉「松藤大治」の生涯ー』を上梓した。この物語の主人公である松藤大治は、私の母校東京商科大学（現一橋大学）の先輩に当たるので、私も微力ながら門田氏の取材に協力した。そのような縁で、『蒼海に消ゆ』を諸兄に紹介したいと思ひ、ペンを執った次第である。

松尾大治は九州出身で、アメリカ・カリフォルニア州・サクラメント市に移住し、食料雑貨商を営む松藤岩雄とヨシノ夫妻の長男として生まれた。大治は、小学校を卒業すると「日本とアメリカを結ぶ外交官になりたい」と、日本で学ぶことを決意し、両親の故郷である福岡県の糸島中学に入学し、同中学を4年修了で、東京商科大学予科に入学する。商大予科では剣道部に所属し、1年生の時から商大最強の剣士として対外試合に負けなしの活躍をしている。そして昭和18年10月の学徒出陣で海軍を志願し、予備学生第14期生として戦闘機乗りには選ばれる。

松藤大治はアメリカ国籍を持っていたので、日本の兵役の義務は免れることができたが、彼は進んで海軍に入隊した。彼はアメリカ生まれで日米の国力の差は熟知しており、この戦争に、日本は勝てないと、学友や親戚に漏らしていたという。にも拘わらず彼は明確に自分が日本人であることを、自らの意志で選択し、学徒出陣の道を選んだのである。

昭和20年4月6日、松藤は最後の昼食である稲荷ずしを頬張りながら、午後1時55分に鹿屋基地を発進、沖縄海域に向かった。そして、午後3時58分「敵艦に必中突入中」の符号信号を残

し、蒼海に消えて行った。その日の特攻による戦果は、アメリカ側の発表によると、空母他48隻が大破し、駆逐艦6隻が沈没したということである。

松藤の戦死から48年後、松藤と共に元山海軍航空隊で訓練を受けていた大野木英雄（東京商大で松藤の1年先輩）は、松藤の母堂ヨシノがロスアンゼルスの人ホームに健在であることを知り、松藤の最後の模様を伝えるべく遙々とヨシノを訪ねた。大野木の話も黙って聞いていたヨシノは、初めて口を開き「男というものは、そうゆうもんです。国の大事には男はキパツとやらにや、大治は立派な事をして死んだんです。そうじゃないですか大野木さん」と。車椅子に座ったままヨシノは、凛として大野木にそう話したのである。戦後、松藤大治の戦死の報を受けたヨシノは、昭和28年、船酔いに苦しみながらも太平洋を越えて来日し、靖國神社に参拝して、大治のため永代神楽を奉納している。

時は移り、平成6年6月22日のことである。訪米された天皇、皇后両陛下は、是非にと希望され、移民以来筆舌に尽くし難い苦勞を重ねてきた、日系一世たちが暮らす敬老引退者ホームを訪ねられた。老人たちは、両陛下を歓迎して、「さくらさくら」や「植生の宿」

を歌って両陛下をもてなした。皇后陛下は、翌年の「歌会始」で、この時のことを

移り住む 国の民とし 老いたまふ
君らが歌う さくらさくら
と詠まれている。

わずか1時間ほどの御滞在であったが、両陛下が会場を退場される時に、天皇陛下は、90歳のヨシノに向かって導かれるようにお歩きになり、「お元気で」と、一言お声を掛けられ、ヨシノに握手された。ヨシノは感激の余り声を出すこともできず、ただ頭を垂れるだけであったという。ヨシノは、この時の感激を、自分にとって「人生の輝ける最高の瞬間だった」と家族たちに語っている。この天皇陛下との握手の写真は、アメリカに住む松藤家の三世、四世たちに、家宝として大切に受け継がれている。

この時の関係者の話では、天皇陛下は、ヨシノの長男が特攻で戦死したことは御存じでなかったという。偶然ヨシノの所へ歩み寄せられたのかもしれないが、しかし事実として松藤大治は、死して母に孝養を尽くしたのである。

平成23年は大東亜戦争開戦70周年であるが、大正100年にも当たる年である。この大戦における戦没者は、240万人を数える。この中で大正世



飛行服姿の松藤大治

代の青年たちは、実に200万人も命を落としている。つまり大正世代の青年たちは、大東亜戦争の主戦力として、国を守り、家族を守るといふ使命感と責任感から戦い、潔く散華していったのである。戦後世代の人たちは、この尊い使命感を持った英霊たちを、軍国主義教育のせいだと見る者がいるが、それは全く軽薄な自虐史観のなせる誤解である。戦時中でも、思想的にも信条的にも柔軟な考えを持っていた人たちは少なくなかった。しかしそういう人たちも、運命に逆らわず、国のため家族のために銃を執り、戦い、そして散っていったのである。

門田隆将氏は、この物語の取材に当たって、この当時の人たちの人間関係の濃さに驚いたと記している。やはり生と死の分かれる極限の状況で、心を交わし合った人たちがなければ理解できないことなのかも知れない。



平成6年(1994年)6月22日、訪米された天皇陛下は日系人の敬老引退者ホームで松藤大治の母ヨシノに歩み寄られ、握手をされた。

言っても戦後48年を経て、松藤の戦友が遙々と渡米して、母堂ヨシノに報告したのに対し、ヨシノが「男というものは、そういうもんです。国の大事には男はキバツとやらにや・・・」と応えた場面であろう。この母にしてこの子あり。これこそ日本の良き伝統の精神であり、文化であると思う。我が61期生も、余生短しといえども、一人でも生き残っている限り、語り部として後世にこの日本の伝統文化を伝えて行きたいものである。

(埼玉陸士61期生会誌『威風堂々』第十五集(最終号)より)

発行所 株式会社集英社
〒1001-8050

事務局からのお知らせ

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
電話 03-3230-6393
定価 本体1600円+税

一 第61回特攻平和観音年次法要の実施について

本年も例年のとおり9月22日(秋分の日・土曜日)午後2時から世田谷山観音寺において、特攻平和観音年次法要が、駒繫神社との神仏習合により執り行われます。詳細については、同封の「年次法要のご案内」に記載してありますので、皆様お誘い合わせの上、多数ご参加くださるようご案内申し上げます。

二 年会費の納入について

今回「郵便払込票」を同封しておりますので、本年度の年会費未納の方はお払い込み願います。ただし、会費欄に「入金済」と表示してある方につきましては、本年度の年会費は既に領収済みですから、お納めいただく必要はありません。

事務局からの報告等

寄附者御芳名(敬称略)

(平成24年4月1日～6月30日)

(単位千円)

- 二五 尼子 和世 一二 菅原 道熙
 - 一〇 常井 功子 七 藤井 常男
 - 七 河野 茂義 三 中原千鶴子
 - 三 笠井 智一 二 星 康之
 - 二 三浦 晨平 二 坂本 康子
 - 二 三浦 正之 二 寺田富美雄
 - 二 藤田 道寛 二 富永宮之助
 - 二 安河内康彦
- 御芳志誠に有り難うございました。

新入会員名簿(敬称略)

(平成24年4月1日～6月30日)

- 北海道 長尾 教正
- 茨城県 廣嶋 利一 鈴木 光徳
- 栃木県 渡辺 衛
- 群馬県 松井 勉
- 埼玉県 中川 法宏
- 千葉県 小渡 朝義 田中 直行
- 東京都 青木誠一郎 中條 弘道
- 神奈川県 加藤 凡順 緒方 秀教
- 小沢 吉一
- 荒井 和彦 毛利 昌康
- 石川県 榊田 良一
- 長野県 西田 雅弘
- 静岡県 永田 利夫

大阪府 上畑 幸晴 宮腰 和男
 小西ひとみ 谷口 智美
 奈良県 湯川 宏幸 福田 常夫
 取田 博善
 長崎県 榎望月旅館
 大分県 水気 博美
 宮崎県 安田 郁子
 鹿児島県 川床 剛士

◆ ◆ ◆
会員訃報 (敬称略)

謹んで哀悼の意を捧げます。

福島県 円谷 信一 (24・5・2)
 千葉県 相澤 茂 (24・4・15)
 久保 愛子 (24・1・8)
 新井 大
 上原 博 (23・10・26)
 神尾 栄助 (24・1・14)
 中島 精 (23・11)
 東京都 広瀬 秀雄
 澤田 武 (24・3・2)
 大林 仁保
 渡邊 瑞正 (23・12・5)
 加藤 安吉 (24・5・2)
 大貫健一郎 (24・3・5)
 神奈川県 市来 正愛 (23・10・24)
 長野県 田中袈裟次
 静岡県 日比野哲丈 (24・3・3)
 本間 武美
 京都府 藤田 三郎 (24・4・3)

大阪府 村田 敏郎
 雑賀 芳三
 西本 徹郎
 佐久間恒和 (24・4・2)
 岡山県 仲矢 昭二
 愛媛県 四宮 一郎
 福岡県 神田 正喜 (24・3・26)
 杉野 一幸 (24・2・22)
 山口 東二

会報「特攻」第91号正誤表

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

- (訂正箇所)
- 45頁1段1行目(横書き) 誤「前村弘(陸軍特幹一期生) 軍歴」 正「野口剛(海軍乙飛16期生) 軍歴」

会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願ひ、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革

昭和34年5月前身の特攻平和観音奉賛会が全国組織化
 昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会発足

- 初代会長 竹田 恒徳 元宮様
- 二代会長 瀬島 龍三 氏
- 平成5年11月財団法人認可
- 三代会長 山本 卓眞 氏
- 平成23年1月公益財団法人認定
- 現理事長 杉山 蕃 氏

- 当顕彰会の主な事業
- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
- ・広報誌等の発行
- ・講演会等の開催その他

- 年会費
- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

〒102-0073
 東京都千代田区九段北3-1-1
 靖国神社遊就館内 公益財団法人
 特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
 電話 03-5213-4594
 FAX 03-5213-4594

ご投稿についてのお願ひ

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願ひます。
- 3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません、必要の場合、その旨お書き添えください。
- 5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛とさせていただきます。

記

〒102-0073
 東京都千代田区九段北3-1-1
 靖国神社遊就館内 公益財団法人
 特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
 電話 03-5213-4594
 FAX 03-5213-4594